

349
307



始



マキアヴェリ原著



權謀術叢論

東園學舎出版部發行

大正
3. 6. 3
内交

序

、 劍太刀解かぬ極みはマキアヴェリー

巻きて藏るゝ時なからまし

日 南

序

一

書の讀むべきものは古典に如くはなし。思想の源
淵となり、立證の典據となるを以てなり。マキアヴェリ
の「プリンス」の如きは古典中の最も權威あるものとし
て讀書子の必ず一讀すべきものたり。其の思想は則
ち群邦割據の間に處せんとするもの、權謀あり、術數あ
り、要は雄心強意自守堅固に歸す。之を今日に應用す
るに生存競争優勝劣敗は個人の間に行はれ、政派の間
に行はれ、階級の間に行はる。彼の群邦割據互に相撃
搏するに似たる所なきにあらず。讀者の以て日用に
利すべきこと疑ひなかるべし。比者金生君喜造英獨
二譯に據り此書を翻譯し來りて余が序を乞ふ。因り

序

一

序

二

て思ふに此書は數ヶ國の語に翻譯せられ剩へ一國亦數譯を重ねるに至る。而して多少異同あり。要は原意を害せざるを以て貴しとなす。余君の此譯を手にし再三反讀行文流暢毫も難解の處を見ず。余は私かに信ず。此書は譯文中の泰斗なるを。而して此權威ある名著の邦語を以て紹介せられたるを喜ぶ。

本書の題名は國君論なり。其意は則ち韓非に似たるあり、老子に類するあり。問々國策と出入す。乃ち題して權謀術數論と曰ふ。

大正三年五月中旬 於 集國學會

文學博士 遠藤隆吉 識

序

歐洲中古の末葉にありて、一方には世界航路の發見、天文上の發見等、人智の啓發の著しきと全時に、他方に於ては封建制度の破壊、中央集權の建設等政治上の變革の甚しきものあり。

此の時に當りて西歐社會の情態及人間思想の傾向如何を顧みよ、人々權謀術數を算して其目的を達せんが爲には欺瞞、陰謀、暗殺、毒言等も以て恥づるなきに至れり。隣國と交るにも亦縱橫の術策によつて利を方畧の中に收めんとする謂ふ所の「外交術」起れり、ヴェニス、フロレンスはデイブロマシイの母と稱せらる。フロレンスの人マキアヴェリは久しく力を其都府の政治に致ししが、後退いて當時政客の性情言動を寫して、「Il Principe」を著せり。譯して君王論と云ふと雖、其實は覇者の權道を論ずるのみ。目的は手段を神聖に稱して、寧ろ陰險陋

序

劣なる手段を獎勵したるやの觀あるは、是當時腐敗せる社會の實情を反語的に直寫したるなり。もし眞に王道を解するの君子にして之を緝きなば顔をそむけて冷汗の背をうるほすを禁せざりしならん。然れども滔々たる世の風潮は、却つて之を權謀術數の寶典となし、世人は抵掌狂喜して之を迎へ、遂に譎詐奸曲の策略を以て、マキアヴェリ主義の語を生ずるに至り、『君王論』を以てマキアヴェリズムの聖書と呼べり。

斯の如き風潮は十六世紀より十七世紀に亘り、十八世紀に入りてもなほ息まざるものありしと云ふ。

(和蘭の人フーゴー、グロッチウスは斯の如き世の風潮を嘆するの餘り、慨然として志を決する所あり。あらゆる辛酸をなめて刻苦精勵する二十年。平戦法規論を著して世人を警醒せり。平戦法規論は即本年の御講習始に於て、穂積博士が御進講申上げたる

所のものなり。

マキアヴェリズムの聖書は、其體裁我國傳ふる所の『太平記評判』と題するものに似たり。『太平記評判』は由井正雪が著はす所なりと云ふ。蓋し英雄の士が卓落の資を懷いて世に容れられず、平生の思ふ所を一管の筆に托して、書卷に懷負を述べたるものならん。マキアヴェリも韓非子の徒と稱せらる。蓋し韓非子は韓の諸公子にして、マキアヴェリは即伊太利フロレンス府名族の後裔なり。共に世道の頹れ人心日に薄きの時に生れて、其主義懷抱の相似たるものあるを以て之を比するなり。正雪や韓非子や、マキアヴェリや、皆曠世の英資を懷きて、或は刑戮に罹り。或は窮巷に老死せり。社會の情勢之を然らしめしか、彼等の言行之を然らしめしか、吾は彼等の言を評して曰はん、言ふ者罪なく、聽く者以て戒しむるに足れり」と。

翻つて茲に我國方今社會の狀態如何と顧みよ、政治家に節操なく、實

業家に道念なく、其他權勢世に時めき車馬門を填るの人士にして、權謀術數を己の事とし、陰險誦詐を恥ぢざる者滔々として皆其比なり。吾是に於て乎マキアヴェリズムの聖書、「君王論」を彼等の面前に呈せんと欲す。蓋し利祿權勢の徒にとりては、本書の如きは即其金科玉條虎の巻たるを信すればなり。勢利の徒に勸む、益々汝の智を研いて、愈々汝の手段を巧妙にせよ。

或人問ふて曰く、「君が居常の言は吾知れり、吾か志す所は世道人身にあり、是ならずや。而して今君が斯の如きの言をなす所以のものは抑何ぞや」と、吾答へて曰く「知らず」。

大正三年三月貴族院に於て海軍豫算大刪減の日

東京小石川の僑居に於て

金生喜造

凡例

- 一 本書はマキアヴェリの名著「Principe」を、ヘンリ、モーリー博士の英譯本及びマクスオーベルブライエル博士の註釋ある獨譯本によりて翻譯したるものなり。
- 一 地名人官名等從來普通の譯語あるものは之を費用し、否らざるものは假字を以て原音を記し其下に英字を記す。其發音はネルソン百科辭書 (Nelson's Encyclopaedia) に従ふ。
- 一 古來希臘伊太利は國內分裂し、王政の國、共和政治の國、各處に割據して、獨立の政を爲せり。是等は其國の大小をとはす、皆譯して國と稱す。從て其主權者の侯伯たると大統領たるをとはす。一概に之を國君と稱す。
- 一 本篇の行文用語は敢て雅と俗とを簡ばす。意達するを以て目的

凡例

とす。而して英文獨文互にその構造を異する所の如きは字句に拘泥せず意をとりて日本文の構造に改む。例へば、

“That Princes ought to be cautious of becoming either odious or contemptible.”

“Verachtung und Hass sind zu vermeiden.”

國君は輕侮憎惡をうけざるやう警戒せざるべからず。

とするが如し。獨文には「警戒」にあたる語なく、又英文獨文何れにも「受けざる」に當たる語なし、さりながら意は正に通ずるを信ず。

譯者識

權謀術數論目次

序 福本日南

序 遠藤隆吉

凡例

ニコロ、マキヤヴェリがピエローデ、メデイシの息なる、最も顯貴なるローレンスに權謀術數論を贈るの書……………一

第一章 統治權の種類と統治權を得る法……………四

第二章 世襲的君主政につきて……………五

第三章 混合國家(一部世襲一部新得)につきて……………七

第四章 ダリオス王の國が歴山大王に征服せられて大王の死後其後繼者に反抗せざりし理由……………一五

目次

第五章 征服せざる以前己に自身の法律の下に統治せられし都市王國等は如何にして治めらるべきか……………三

第六章 其人特有の武器勇氣によりて贏ち得たる主權につきて……………五

第七章 幸運と他人の助けとによりて得たる君權につきて……………四

第八章 奸惡不正の手段によりて權勢を得たる國君等につきて……………六

第九章 民選邦國につきて……………七

第十章 王政の權力を見積る法……………八

第十一章 法王政を論ず……………九

第十二章 軍隊の種類を論ず……………一〇

第十三章 援兵を論ず……………一〇

第十四章 軍隊との關係に於て國君のなすべき本務……………一五

第十五章 國君の名聲又は誹難は何に由つて來るか……………一六

第十六章 寛仁大度及び吝嗇につきて……………一七

第十七章 殘酷と温和に就て併せて君主は恐れらるゝと愛せらるゝと孰れを選ぶべきかに就て……………一八

第十八章 國君は如何なる程度まで己の約を守るべきか……………一九

第十九章 國君は輕侮嫌惡を受けざるやう警戒せざるべからず……………二〇

第二十章 要塞其他防衛工事は國君にとりて有用なるか又は有害あるか……………二一

第二十一章 國君は其名聲を博する爲に如何に身を卑うすべきか……………二二

第二十二章 國務諸大臣につきて……………二三

第二十三章 便佞の徒は如何にしてさくべきか……………二四

目次

第二十四章 伊太利に於ける國君の多くが其領土を失ふ

に至りし所以……………一八二

第二十五章 運命は如何なる影響を人事に及ぼすか……………一八六

第二十六章 伊太利を蠻族の司配より自由にすべしとの聲……………一九三

附 録
目 次 終

権謀術數論

ニコロ、マキアヴェリ著

金 生 喜 造 譯

ニコロ、マキアヴェリが、ヒエロー、デ、メディシの息なる、最も
顯貴なるローレンゾに權謀術數論を贈る書

凡そ國君の寵を得んとするものは國君が貴重して措かざるもの、又は極めて好愛する所のものを献して自ら推參するを普通とす。故に國君に送るには屢々軍馬を以てし、武具を以てし、金衣を以てし、寶玉を以てし、其他國君たるの威嚴に然るべき裝飾品を以てす。某も亦閣下に對して心事を傾倒することを表せん念切なるが故に薄儀を贈呈せ

権謀術數論

二
んとして求むれども、然るべき品一つも藏せず、故に某は偉人の行爲と
事業智識より貴重なる贈呈品(少くとも某にとりて)はなかるべしと思
推す。是某が近世の事件に就て見聞する所と、古の事件につきて多年
研鑽する所とによりて學び得たる者なり。而して多年精勵して考察
の結果、之を小冊子に約納して、敢て閣下に捧呈せんとす。もとより閣
下の前に呈するに足るの著にあらずと雖、献芹の微衷なれば、閣下の寛
仁なる、某が多年刻苦精勵して蒐集したる所を、小時間に理解するの能
力を贈呈するより外なきを諒とせられ、之を受理せらるべきを信する
ものなり。又某は措辭文飾其他この種の著述に普通なる外部的美裝
を以て、之を飾ることをなさざりき。又事の眞實にして嚴肅なるに對
する稱賛以外、何者をも嘉稱せられざらんとを希ふ。又某が如き下賤
の者が敢て國君の行爲を論議して之を規定するを以て、僭越の罪と
なされざらんことを欲す。其故如何となれば、山態丘容を觀察せんと

欲する者は平野に下り、谷野を知らんと欲するものは高陵に登るが如
く、民の性を知らんが爲には國君たるを要し、國君の性を知らんと欲せ
ば下民たらざるべからず。

夫れかくの如くなるを以て願はくは閣下この小冊子を受け給はん
ことを。而して精勵して思をここに致し、之を緝かれなば閣下の才幹
熟達と幸運とによりて豫想せらるゝが如き偉大に達せらるべきなり。
其名譽赫々たる高所より、某如きが屬する下層を見おろし給はば堪へ
ず、某が逆運の穢弄する所となれることの如何に不當なるかを知り給
ふべきなり。

第一章 統治權の種類及び統治權を得るの法

凡そ人類の上に統治權を行ふ所の國家若くは政權なるものは共和政か王政かの二種を出でず。

王政は世襲なるものにして其起源如何を尋ねれば其君主の祖先が歴世永く占有したりし統治權を繼承したる者なるか又は極最近に之を得たる者なるか。二種其一ならざるべからず。其新たに主權を得たる者は例へばミランのフランシス、スフォルザの如く、全然根底より新たに得たるあり。或はネーブルス王國がスペイン王に屬する如く獲得したる土地を已が世襲の邦國の一部分として併合したるあり。斯の如くにして得られたる併合の領土は既に早くより國君の統治の下にありし者あり。或は自由に生活するの慣はしかりし者あり。他の國君が之を獲得するは、或は自己の軍隊により、或は援軍の力によ

るなり。而して其成功する所以は勇敢又は幸運なるなり。

第二章 世襲的君主政につきて

共和政に就きては、他の書に於て詳かに論じたるが故に茲に之を論ずるを止め、茲には單に君主政について記述すべし。余は前記の區分に從ひ、世襲的君主政が如何にして獲得せられ如何にして維持せらるるかを述べん。

余は茲に斷言す、世襲的國家を維持するは新に建設せられたるものを維持するよりも易し。何を以て然るかといふに世襲的國家は單に先人の殘したる例を踏襲して之を破らず、偶發の事件に對して適應するのみなればなり。故に、若し偉大非常なる勢力あるありて之を篡奪すること起らざる限りは、其れを保ち得ると疑ふべからず。よしかか

る篡奪のありたる時に於ても、一たび逆運が篡奪者を襲はんか、忽ちに
して王位を復するを得んのみ。伊太利に於てその例あり。フェララの
君即是なり。彼は千四百八十四年ヴェニス人の侵入に對して勇敢に
之を支へ其後法王デューリアス第十世に對してよく支持したり。何に
よりて然るを得しか。只其政權が古き歴史を有せしと云ふことはのみ。
生れ付きの君主は、臣下を壓制するの必要を有せざるが故に、臣下によ
り多く愛せらるゝものにして、非常なる悖德惡行によりて嫌忌せらる
るに至らざる限り、其臣下の愛情を保持し得べきなり。かくの如くに
して政權を掌握すること久きに及べば之を改新せんとする原因と記
憶とは全く除去せられ一の新しき變化は常に建築の際に於けるが如
く舊き基礎を覆ひかくすものなるなり。

六

第三章 混合國家(一部世襲一部新得)

につきて

然れども、困難の存する政府は建設の日なほ淺き者なり。殊に其の
國家が新なるにあらずして其の一部のみが新たなる時に在り。所謂
混合國家是れなり。かかる種類の國家に於ては種々なる困難の起り
來るとあり。何となれば、人民は、より善き状態に遷るべき見込あれば
何時たりとも、其の君主を換へることを意とする者にあらざればなり。
而して這の希望は民を驅つて謀反に趨かしむるものなり。然れども
多くの場合に於て、彼等人民の見込みは到底成就すべくもあらず。其
状態の寧ろ險惡に赴くことは彼等が自身經驗して知る所なり。

夫の新しき國君は、多數の軍隊を擁し之を臣下の上に駐屯せしめて

八
覆歴し、彼等を嫌惡せしめ、或は賦課、収斂、其他各種の困難を感せしむべし。新らたに王位に上り新らたに征服者たるものにありては避くべからざるの結果なり。

故に國君は其篡奪によりて苦しめられ且つ害せられたる者を以て其の敵と作すべく、而も一方に於ては、彼を助けて王位を得しめたるものを彼の友とすること能はざるなり。そは彼は彼等の豫期せし願を満足せしむる能はず、又彼が恩恵を加へたりとの理由を楯にして彼等に大なる救済を與ふることなし得ざればなり。

かくの如くなるを以て、若し敵國を侵略せんと欲せば、其勢はよし極めて強からざるにせよ。其軍隊は甚多からざるにせよ、先づ其國人の心を得ざるべからざるなり。見よかの佛のルイ十二世が忽ちにしてミランを陥れ、復忽ちにして之を失ひたるを。畢竟かくの如き理由の存すればなり。ミランの民は箠食盡漿してルイ十二世の軍を迎へた

るが既にして其至るに及びてや、彼等の望は空しく水泡に歸し、其豫期せしが如き福利を得ること能はざりしが爲に、新王の横暴を耐ふること能はざりし也。

一度反抗して遂に畧取せられたる國土は容易に失はるゝとなかるべし。何となれば國君は其謀反によりて已を固むるの必要あるを知り、少數者を罪し、嫌疑者を糺彈し、已に薄弱の點ありと思ひつきし所は之を鞏固にする手段を取るに至るべければなり。かくの如くなるを以て、ロウドヴク伯が佛人の手よりミランを援ひし時、其第一回は却て其國境の住民を膾炙し苦しめたることありしのみ。其第二回に於ては、伯は天下を通じて對佛の同盟をつくりて武をことのへ、以て其軍を伊太利の外に驅逐せざるべからざるが如きことなれり。畢竟是前述の原因より來れり。而して佛蘭西は伊太利に於ける領土ミランを失へり。

第一事件の一般的理由につきては己にのべたり。茲に吾人は第二の一般的原因を考察せざるべからず。而してかかる場合に際して、如何なる方法をとるべきか、及佛王のなしたるよりも優れたる方法如何を考察せざるべからず。

新に獲得せられたる領土にして、征其者の舊領土に併合せられたるものは、同國なるか、同國語なるか、又は然らざるなるかを記憶せざるべからず。其第一の場合の如きは、其の領土を保つと極めて易々たり。殊にその民に自由の思想少ければ益々其治め易きを覺ゆべし。而して其領有を確かならしむるには、只以前に治めたる國君の家族を勦絶すれば足れり。人民は他の事物に於ては、何等の差異なきを以て、毫も動搖の氣を起さざるなり。パーガンデーの如き、ブルターニュの如き、ガスコインの如き、ノーマンデーの如き、實に然りし也。是等は皆佛蘭西政府の下に久しくかかる状態を保ちたりき。勿論彼等の言語には

多少の差異ありしにせよ、其法律習慣相同じきを以て、彼等は易々として相和したりき。

故に人若し斯る領土を得て、之を保持せんとせば、特に注意を拂ふべきこと二あり。一に曰く、従前の國君の家族を勦滅せざるべからず。二に曰く、何等の法律も何等の課税も強ふべからず。是によりて、暫くの間、新領土は舊本國と混和し合一するに至るべきなり。

次に、言語、風習、法律等の異なる國を征服したる場合に於ては如何といふに之を保持すると極めて困難にして、且天祐と多大の勉勵を要すべし。而してこれをなすの最上にして、且つ最も効果ある方策は、侵略者自らその新領土内に居住するに在り。これ其領有を安全にし、且つ永續的ならしむる所以なり。かの土耳其が希臘に對してなしたる事例によりて知るべし。即土耳其が其都をコンスタンチノーブルに遷さざるに於ては、他に如何はぞ希臘を隸屬せしめんとの方策を講ず

るごも能はざりしかり。其故は身親しく其領土にあれば騒亂の發生せんとするや、其當の時に於て之を豫防し得べきに反し、僻遠の地にある時は、之を知るは一に流説により、而して耳に入る頃には己に治す可らざる程度に及び居ればなり。且つ、其領土が國君の居に近ければ軍隊の掠奪に逢ふことなし。國君近きにある時に當り、國君にして喜人ならん乎、人民は彼を愛して城壁を隔つるの感なく、若し惡人ならんか之を恐れて乱をなさじ又。外人之を攻撃せんとするとあるも、層一層の注意用心をなすことを得べきなり。去れば其住所の新領土内にあるこそ必要なれ。

第二の方策は新領土に植民するは是れなり、所謂、鍵鑰の地たるべし、この事を等閑に附して顧みざらん乎、則ち歩騎の師を境外に出さざるべからざる必要に迫らん。吾人は之を策の得たるものと稱するごと能はざるあり。何となれば、植民のとたる、出師の費に比して巨大の

國費を要するものにあらざればなり。國君が之れがために費す所は極めて少く、而かも、少數なる植民者の居住を得る必要上新領土に於る少數者が其家と土地とを收用せらるゝにすぎざるなり。これによりて損害を被る者は、所在に散せられ且つ貧困に生活する身となるが故に、禍害をなし得るの憂なく、而して土地の收用を受けざる者は、平隱無事に生活することを得るが故に、誤つて自ら隣人と同一の情態に陥らざる以上騒擾をなすこと無かるべきなり。

余は斷言す、この少數の費用を以てしたる植民は最も有効なり。忠實にして且つ従順なる者なり。若し植民を樹てずして軍隊を駐屯せしむるとせん。其費用は領土の歳入を喰ひつくして、收支相償はざるべく其軍隊は國內に蹂躪し従て民人の困厄となり、其憤怒を買ひ復讐心を起さしむるに至るべし。異國より來れる軍隊の乱暴なるに對して發する所の憤怒は最も危険のものたるを知らざるべからず。故に

此種の防禦は何れの點より見るも、策の得たるものにあらず、植民を以て有利の策とせざるべからざる也。

尙、前述の如く其體裁を異にする領域に主たる人は、宜しく劣等なる周囲の民衆の頭領となり、且保護者たるべく、已より有力なるものは之を弱め之を劣らしむることに努力すべく、自己と全等の力を有する者のその領域内に入り來ることを常に注意して妨ぐべきなり。何となれば、域内不平の徒は、或は野心を懷き或は恐れを懷きて常に何者かを域内に誘ひ入れんとすれば也。是れ曾てエトリア人の爲したる所なり。ローマ人は土着の人民が招致するに非ざれば何れの州にも決して入ることなきものにしてエトリア人は實に之をギリシアに誘ひ入れたり。かかる事が如何にして行はるるか云ふに、其最普通なる方は、外國の一君主が、或領域に入るや、其州内の弱者にて其君主の恩恵に浴し居らざるの徒は、已れが上にありて己れ等を壓伏せし者共に對

する競争と怨恨の情とより、且つ又新來の君主に對する尊敬の情とよりして、忽ち相合せんとを努め、之を達するが爲めには如何なる努力と雖も厭ふ所にあらざるなり。其目的の一たび達せらるるに及びてや忽ち一國となり國を擧げて新王に歸せんとするなり。

征服者のなすべき特別の注意は、あまりに強力にならざるべきことと、あまりに其權威に信頼せざるべきことと是なり。此くの如くなれば彼は已の軍勢と其援助とによりて、彼が隣州の強大を壓碎すること容易なるべく其絶對專政者たるべきなり。この點の云爲行動に於て思慮を過らん乎、彼は忽ちにして折角得たる所を失ふべく、たとへ失はざる迄も彼は幾多の困難と苦境とに陥るべし。

古のローマ人は彼等の征服したる所に對してこの處置を取りたるものなり。彼等は殖民を樹てたり、彼等は已に劣りたる者を保護し強者をして弱からしめ而して外國の首長をして其領域に注意を拂はし

むること無からしめたり。余は茲に其例としてローマのギリシヤに對せる處置をのべん。ギリシヤの中エトリア人 (Eolians) 及アケイア人 (Achaians) は保護せられつゝありしが、マセドニア王國は壓伏せられアンチオカスは追出さるゝに至りぬ。然れどもアケイア人とエトリア人の功績と忠誠とは以て何等權力の増加を齎らざりき。而してフィリッポの懇願も、以てローマ人をして已に親善ならしむこと能はずして遂に打ち破られ、而してアンチオカスの力も以てローマ人をして彼がギリシヤ國に於ける**誨**配權を保留せしむること能はざりき。何となればローマ人はこの事件に於て賢き國君のなすべき如くに現在のことに、眼を有すると共に將來の煩累に對する眼を以て、而かも精勵に精勵を盡したればなり。危険は尙未だ遠方にある時之を防ぐこと容易なれども、其の近に至るまで之を引き延べん乎、病膏盲に入り、療法理不盡に落ちん。これにつきて思ひ出でらるゝはかの醫家の謂は

ゆる消耗熱 (Typhic fever) なり。其初期に於てはこれを認むると難くしてこれを治むると實に易々たり。其徵候認め得られざるがままに放任し置く時は遂には誰の目にもつくやうにあるが、その時は治療極めて困難とあるものなり。これは邦國の事に關しても同じにて、遠き未來に認められたることは——これは極めて遠望思慮ある人のみか認め得る所なるが——損害を醸す如きとありとすも、容易に救治し得べき小害にすぎざるのみ。然れども苦し無知なるが爲に或は怠慢なるが爲に、万人等しく認め得る迄に放置する時は、救済の方法なきに至るべし。是即病膏盲に入るものなり。是の故にローマ人は難の至ることを遠く未然に察知し、戰爭を避けんと欲して禍害の接近するか如きとなからしめたり。彼等は戰の遷延せらるるも避け得べきものにあらざるとを承知し、且遷延は益々敵に都合よからしむることを知りたるなり。ローマ人がマセドニア王フィリッポ及ギリシヤ大守アン

チオカスが伊太利に打ち入りて此に戦争を開かんより寧ろ希臘に於て彼等と戦はんことを決せしは誠に所以有り。彼等もし戦を避けんとせば避け得られしならん、而かも彼等は是を適當と思はざりき。其故は今の所謂新政治家が口辭の如くに云ふなる「時の花を簪にせよ」*enjoy the present breath of time*と云ふことをは味ふこと能はずして己の勇氣と思慮とを以て奮進することを選びたればなり。又時なるものは善にせよ惡にせよ、凡てを進行せしむることを知りたればなり。

茲に余は眼をフランスに轉じてルイ十二世の行爲を見ん。チャールス八世につきて語らざるは、ルイ十二世の伊太利に於る領有の永かりしだけ、吾伊太利人には彼が行爲の多く親炙せられたる者あればなり。外國の領土を保つため、國君の守るべきとに一々矛盾したる行爲ありしは最も注意すべきなり。ルイ十二世はヴェニス人によりて伊太利に誘ひ來らしめられたるが、ヴェニス人は彼の入來によりてロン

バルヂ (*ombardi*) の半を得んことを企てたりしなり。余は彼の野心を非難するものに非ず、彼は何處の場所たるを問はず友を得ば之を保たんことをつとめぬ。其のロンバルヂアを征服するや、彼の前王チャールスが落したる名聲と威嚴とを回復したり。彼に歡を通する者曰くゼノア、曰くプロトレンス、曰くマンチュア侯、曰くフェララ侯、曰くベンチオグリオ家、曰くフェーリ夫人、曰くフェーレンツマ、ベソロ、リミニ、カンリノ、ピオムビノ等の領主是あり。ルツケシ家、ピサニ家、サネシ家、是等は皆入來王の許に來りて同盟和睦を告げたり。こゝに至りてヴェニス人は始めて己等の思慮の大に至らざりる思ひき。「吾等はロンバルヂアの二都を得んことを欲したりしのみ、而して佛王をして全伊太利の三分の二を得しむるをなせり」と。王もし前述せし所の法則を守り其州を保護したらんには、己の名聲を持続せんこと如何に容易かりしか何人も疑はざらん。盟友には、法王あり、ヴェニス人あり、多數にして

而も常に彼の保護によりて立つの必要あり。彼等の援助ある以上如何なる敵出づることも毫も意をなすに足らざりし也。然れども彼がミランを得るや否や、彼は乃ち言を左右に托し法王アレキサンダーをしてロマグナの領主とならしめたり。而して彼自らは盟友の同情を失ひ法王が従来有せる宗教界の大勢力に加ふるに俗界の大勢力を以てするに氣附かざりし也。この第一の誤につぐに第二の誤を以てしたるを以て、再び伊太利に入りて、法王の勢力に限定を加へ、法王をしてトスカナを占有せざらしむるの必要を見るに至れり。王は教會の勢力をいやが上にまし盟友の同情を失墜したるに止まらずネーブルス國王の切なる願によりて之をスペイン國王に分たざるべからざる止む無きに至れり。茲に至りて伊太利の運命は彼の手におへざるやうになれり。彼は已に不幸を懐ける徒輩を呼合して其頭上に上り得べき一の敵手を見るに至れり。

是れ極めて自然のことにして、毫も怪しむを用ゐざるなり。何となれば凡國君たるものは、己の才量に叶ふことだけを企つるときはつねに賞賛せらるゝものにして、たとへ賞賛せられざるまでも、それが爲に非難を蒙ることなし。然れども己の力の及ばざることを企て自ら計るあたはざるごきは誹らるゝも亦止むを得ざるなり。是の故に、もし佛蘭西にして、自國の軍勢のみを以て、ネーブルスに畫策するにありしならんには、或は之を遂げしならん。然れども、もし能はずとすれば則ち之を分つべからざりし也。若し彼がヴェニス人に同意したるロンバルディアの分割が、伊太利に踏み入るの地点を求むるとの理由によりてなされしならば許すべきと也。然れども、ネーブルスをスペインに分割せしが如きは、前述の必要に迫られて爲したるにあらざるが故に大に鼓をならして責めざるべからざるなり。ルイ王は即ち此役に於て五つの誤をなしたる者と云ふべし。曰く

彼は弱少の領主を滅したり。曰く、彼は隣邦國君の領土を増大したり。曰く、彼は已と等しく權力ある外人を呼び入れたり。曰く、彼はその地に永住することをなさざりき。曰く、彼は植民をたてざりき。この五者のみなりせば王の生存中は、或は不結果を生ぜざりしやも知れず。然れども第六の誤はグエニス人の權力を奪ふに存し實に王に致命傷を與へたり。王もし教會の肩を持つとなく、又スペイン人を伊太利に入ることなかりせば、王がグエニス人を壓滅せしも過度の仕わざにあらざりしならん。然れ共王が前述の舉に出でしとなば、グエニス人をして亡滅せしむべからざるなり。何となればグエニス人の勢力が全き時は、外人のロンバルデアに入ることを防ぐに足り、又ロンバルデアがグエニス人に渡さるゝとの條件にあらざれば、彼等は外人のロンバルデアに入るに同意せざるべく、又外人はロンバルデアを佛人の手より奪ひて彼等に與ふるとは恐らくは爲さざりし所なれば也。

而してこの兩者を敵とすることは、何人か其の勇氣を存せんや。若しルイ王必要に迫りて、法王アレキサンダーにロマグナを、スペイン王にネーブルスを與へて戦争を避けんが爲なりしとならば、余は答へて曰はん、現在の難儀を以て戦争を回避するの具たらしむべからず。何となれば戦争は到底避くべからざる者にして、之を延期せしむるや其來るや更に大なる不利を伴ふべきを以てなり。

茲にルイ王が法王にロマグナを與へんとしたるは、法王がルイ王の離婚に對する同意と、アムボイスの法皇使節に彼の願によりて大僧正帽を加へたることに對する返禮としてのことなりとて、余の言に反證を唱へんとすれば、余は之を次に論せんとする所の國君の誠實忠信、其如何に忠信ならざるべからざるの義務あるかに、照し合せて論せんと欲す。

故にルイ王がロンバルデアを失ひしは、他の國君が他邦を取りて之

を保たんと欲して守る所の法則を守らざりしに由るのみ。而して是れ決して異常のことにあらずして、日常起りつつある所のことたり。而して之れある亦理なきに非ず。余曾てナントに於て君牧師アムボアズ (Cardinal P. Amboise) を論じたるにあり。恰もグレンチノ (法王アレキサンダーの子 Caesar Borgia の通稱) がロマグナの領主となりたる時なり。君牧師曰はく、「伊太利人は戦術を知らず」と。余曰く、「佛人は國事を解せず」と。彼等もし少しにても政策の何なるかを解したらんには、法王の教會をして今日の如き位置と大勢力とを得ざらしめしならん。法王權の盛なると、スペイン人の伊國內にあることは、是れ佛人の誘致したるものなるは、經驗によりて知るべき耳。其結果は彼等自身に及び彼等は伊國より其影を滅するに至れり。

以上のことよりして一の法則出づべく而して除外例あること殆んど稀なり。曰く、

誰人と雖も他人を大にする者は、自ら小となる。何となれば這の擴大は行爲者の勤勞又は力に基すれば也。勤勞や、力や、是れ強大せらるるの人に遂に傾くものなればなり

第四章

ダリオス王の國が歴山大王に征服せられて、大王の死後、其後繼者に反抗せざりし理由。

新に征服し得たる主權を保つの大なる困難あるを思へば、彼の歴山大王が數年にして亞細亞を席卷し、之を得るや、忽ち濫焉として逝くの後、其邦國を紊亂せしむることなくして維持し得たる、其方法は蓋し驚嘆すべきものあり。大王の後繼者等は何等の困難なる事件の起るこ

ともなく又何等の騒動もなくして、久しく平和を樂しむことを得たり。只反亂を醸したるは彼等後繼者自身の貪慾野心が其原因たりしのみ。其故如何と云ふに、凡そ載籍の記す所によりて之を考ふるに國家を統治するの形式二あり。一に曰く、國君及び其の恩惠を被りて其の政治に參與することを許されたる臣下によりてなされるもの。二に曰く、國君及び小貴族等(この小貴族等と云ふは國君の恩惠によりて貴族たるにあらずして、其由來の舊きと其祖先の高貴なることにより貴族たるものよりなされる者)。而して小貴族等は彼等自身の土地と臣下とを有し、臣下よりは君とし認められ、其倚賴する所たるものなり。

第一の國君及び臣下によりて統治せらるる所の邦國にありては、其國君は專横にして絶對的なる者なり。何となれば何人とも雖も國君の優越を認めざるものあらざればなり。彼もし他人に聽くことありとするも、それ只彼が下なる宰相としてこれに聽くことをなすにすぎず。

臣下も又かかる人を特別に尊敬することなし。

以上二種の政府は、トルコ及フランスに就て之を見ることを得べし。全トルコは一人の君主によりて治められ、他は彼の御用を務むるもの即ち臣隸なるのみ。全國幾多の行政區劃に分ちて之をサンヂアッチ(Sangiacchi)と稱し、人を遣はして之を治めしむと雖、之れが任免は只王の思ふが儘に勝手次第に行はる。佛蘭西に於ては然らず、佛王は各主權を認められたる幾多の貴族の真中に座する者なり。其貴族は舊來久しく國王の臣下より尊敬せられて、以前より己に顯貴なるものなり。國王若し貴族等の權を奪はんとすれば、己自身に必然危險の及ぶことあるべし。此れ等兩種の國体を考量するとき、何人も土耳其の征服し難くして、而かも一たび之を畧せんか、之を維持するは佛國を占領するよりも易きものあるを知らん。其征服するの困難なる所以如何といふに國內には貴族ありて、侵畧者を迎ふるにも非ず。又軍人の大な

るものありて侵畧者の企を援くるものもなければなり。是等は已に前述せる所よりして明なるべし。國民はすべて皆これ臣隸にしてこれを誘惑すること能はず。たとへ之を誘致利用することを得たりとするも、邦國の組織が前述の如くなるを以て、侵畧者の大なる利用となり得る程の團體となすを得ざるなり。是の故にトルコに侵入せんとする者は、その國の案外統一完全なることを發見すべく、國內の叛亂のあらんことを豫期するなどは全く夢の如し。寧ろ自己の軍隊の力に依頼せざるべからざるなり。然れども一たび征服して、其の軍勢を打ち碎き、挽回の勢なきに至らしむれば、最早何等の危険もあることなきなり。何とあれば、至トルコを通じて何等恐るべき侯伯のあることなき、只恐るべき國王の一家のみなりしに、これを勦絶すれば、人民を呼び起して團體を作り得べきものは一人も存するなく、人民は戰勝の前に頼みにならざりしが如く、又戰勝の後には毫も恐るるに足らざるなり。

然れども、フランス流の統治組織を有する國家を征するは全くこれと反對なり。侯伯の或者は常に不平にして何等かの變化を望めるが故に、これを味方に得て、其國內に入ることを容易なり。彼等は前に述べし如く、侵入君主の來らんことを歓迎し、其勝利に貢獻する所あるものなり。然れども一度之を占領して、其の侯伯を利用せんとするも幾多の困難と災害とに逢ふべし。故に國王の族を勦絶するを以て足れりとなさず。侯伯の殘類のあらん限りは、彼等機に乗じて騷亂の首魁とさるべく、而して彼等は勦絶するとも満足せらるることもなし得ざるが故に、侵畧者は遂に驅逐せらるゝの運命を免れざるべし。扱てダリオスの政府の性質如何と顧みるに、甚だトルコ人の政府に似たるものあるを發見すべし。是れ歷山大王のペルシアに攻め入らざるを得ざりし所以なり。歷山戰捷の後、ダリオスの死するや、ペルシア帝國は無事平穩に歷山の手へ歸したり、其理由は己にのべたる所の如

きなり。而して其後繼者が續きたらんには、永く平和に國を保つを得たりしならん。何となれば彼等自身の醸す所の騒亂を外にしては、全國を通じて反謀の次いで起るべきものあらざりしが故なり。

然れども佛蘭西の如き組織の國に於ては、其趣之と異なり、之を平和に保たんこと不可能なり。故にローマ人の配下でありしスペイン、フランス及びギリシアに於ては地方幾多の侯伯のありしがために騒動の起るは免れざりし所也。而してローマ人は永く不安の念を以て是等の邦國を領有したりき。然れどもローマ帝國の權力の大と永續とによりて侯伯等の恐るゝに足らざるに及びてや、是等屬領地のローマ太守等自身が四分五裂し、各一定の領土を保有するに至れり。

是等の理由を考察すれば、歴山大王がアジアの帝國を得たることの實に容易にして、他の一方に於ては、例へばピュールヌ(Purilus)が侵畧に多大の困難を感せしと、毫も異むことを須ひざるなり。畢竟するに是

征服者の徳の大小如何に由るにあらずして、征服せらるゝ民人の性質如何に由ること多きのみ。

第五章 征服せらるゝ以前已に自身の法律の下に統治せられし都市王國等は如何にして治めらるべきか。

新に征服せられたる邦國にしてその以前自由に慣れ自身の法律の下に統治せられたるものを處理し行くに三つの方法あり。

- 一に曰く、之を滅亡するにあり
- 二に曰く、捷者自身領國內に居住するにあり。
- 三に曰く、征服せられたるものに彼等舊來の特權、法律の恩惠を被ら

しめ、征服者自らは彼等の献する歳入を以て満足し、一種の國會の如きものを、征服者の利益を思ふものを以て組織し、以て民人を平和に維持するにあり。

この議會は、征服者によりて組織せられ且其恩恵によらずんば成立し得ざるを知るが故に彼が主権をして安全ならしむる如き方法は凡て之をなさざるなく、盡さざるなけん。古自由の思想を味ひ自由の生活をなしたる都市は、これを征服したる際その市民の習慣を用ゐて之を治むるよりは、降伏の狀に保つ方が平和に治め易かるべし。是スバルタ人及ローマ人のなしたる例につきて見得べき所たり。も知る政スバルタ人は曾てアゼンヌ人及テーベ人を征服し之をして寡頭政治を彼等の行ひしが如き儘になさしめたり。而もスバルタ人は忽にして之を失ひたり。反之、ローマ人はカピュア、カルセージ、ニーマンシア等を保たんが爲に之を滅亡せしめたり。即破壊して之を保ちたり。後に至

りて、スバルタ人のなせし如く、自由を許し舊來の法律の下にあらしめてギリシアを保たんとしたるの誤るを見たりしなり。是の故にローマ人はギリシアに於て支配權を保たんが爲に、其數市を轉覆せざるを得ざりき。是余が知れる最も安全なる方法なり。是の故に何人にも自由都市を征して之を破壊せざる者は大なる誤をなせる者にて、やがて自ら滅亡するに至るべし。何となれば被征服者もし反謀せんと欲せば、何時にても「自由」てふ美名をとり、祖先傳來の法律に訴へ、之れが感情を利用し得べければなり。故に彼等が或方法にて區分せられ所在に散布せしめられざる以上は、昔の自由、法律を培養すべきあらゆる手段をとりて、自由の思想は片時も彼等の念頭を去らざるのみか折もあらば、之を恢復せんと努力すべし。これピサが多年フロレンス人の配下にありて而して後之をなせし所あり。

然れども王國又は都市にて君主に治められたりし處は、其王一たび

族滅せられん乎。前述の如きこと到底起り得べからざる也。何となれば一方に於ては由來服従になれて居り、一方には王族の滅亡によりて爲す所を知らず、新王を立つべき方法もなく、さりとて王をくつて自由に生活することは夢想もせざる所なれば也。是の故に彼等は容易に反謀する氣遣ひもなく、新王は難なく彼等を手なづけ、已の位置を安全ならしむることを得るなり。然るに共和國にありては被征服者の憎みは頑固にして、其復讐心は醫し難きものあり。彼等舊昔の自由の記憶は消し難く、鎮め難し。故に最安全なる方法は全然これを亡滅するか又は其域内に居住を移すにあり。

第六章 其人特有の武器、勇氣によりて贏ち

得たる主權につきて

新しき國家主權等のことを論じて、雄大顯著なる例を引用するも、敢て奇異の感を起すなかれ。凡そ人は先人の遺蹟を蹈み之を模倣せんとするも正確に手本通りに行ひ得ること能ざるものなり。而かも精神優秀なる人は常に優れたる偉人の行爲を手本として已の前に置くことを要す。其徳と力とを以てして先哲のなしたる如き完成の域に到り得ざるまでも少くともこれに近づき、幾分か其感化を被ること明かなり。

善く射る者は、其標的の遠くして、又已の弓の力の弱きを知る時は、的より少しく高きにねらひ、彈道を描きて以てその的の真中を射り、其的

に近きて發したるを全じ効をなすものなり。茲に余は成り上りの國君によりて得られたる主權は之を保たんことに多少の難易ありと云はん。つまり其者の才畧多少如何にあるのみ。而して匹夫が一舉にして國君とあるには、そこに大なる力と天運とあるを要するが其大小多少に従て其の遭遇する困難にも亦多少の別あり。而して天運に倚賴せしことの最も少き者は、主權を保つこと最も長きなり。而して又國君他に居住の地なくして、被征服者の地に交り住むときは、困難をせき留むること大なり。天運に頼ること最も少く、己の徳によりて國君に昇りたるものを數ふれば、モーゼス、ロムラス、キロス、セシウスの如きを擧げざるべからず。而してモーゼスは、唯一の神の使命の宣傳者なりしが故に、彼をこゝに擧ぐるは讀者も、勿論と首肯する所なるべけれど、キロス及其他の戰捷者、王政の設立者に對しては之を異常とすものあらん。然れども彼等の生活、彼等の功績を考ふれば、彼等また斯の

偉大なるモーゼスに似たるものあるを發見すべし。即彼等の生活及行爲に就いて之を見れば、彼等が新主權を贏ち得るには、只機會を逸せざりしものにて、特別に天運によりて然りしには非ざるなり。もしこの機會なかりせば、彼等が大胆なる勇氣を顯はすこと能はざりしならん。又此無能の人なりせば、この機會も空しく逸したりしならん。是の故にモーゼスにとりては、イスラエルの民がエヂプトにて捕はれしことは、彼等がこの桎梏をのがれてモーゼスに従ふ爲に必要ありし也。又ロムラスが若かりし折、アルボに焼き出されて野獸に馴れたる生活を送りしことは、彼が後來ローマの王となるべきが爲に好都合なりしなり。全じくキロスにとりては、彼斯人がメデスの暴政に向つて反謀したりしを發見せしことは、彼等が後來從順に平和を樂しましめらるる爲に必要なりしなり。セシウスは、もしアテネ人が大因亂の狀態にてあらざりしならば、彼の徳と寛大の心を示すべき機會はなかりしな

らん。斯の如き利點は以て彼等を顯彰の人物たらしめたり。彼等其容知を以てこの利點を彼等自身の名聲と邦國の改善とに利用すべきを知りたりしなり。

以上述べたる如き、自身の徳によりて、國君となりたる者は其目的を達する前に幾多の困苦を括めたり。而して一度この困難に打かつや其主權を保つとは容易なりき。其困難は一部は新邦國を建設する爲に、作らざるを得ざる新法律習慣より來れり。而して己自身を以て國君となし、新法を作るよりも大なる困難はなく、これに成功せんとするより不確實なることなく、これを處理せんとするより危険なるはなし。このことよく／＼考量せざるべからず。何となれば舊法の恩惠を感ずるものはすべて、新法を敵視するの人なればなり。而も新法によりて利を受けんと豫期する人も、これを辯護すると極めて冷淡にして且つ生温きのみ。それも尤なることにて、かゝる人は、一方には舊法を有

し之を有り難く思ひ居る者を恐るゝより、一方には新しきことが完成さるゝまでは遲疑してこれに信用を置くに逡巡するがためなり。故に新法を憎む者は敏捷大胆に機會をさらへて攻撃するに對し、新法の味方は極めて緩漫無氣力なるが故に、國君は通常其味方諸共亡滅の不幸を見ざるを得ざるなり。

故にこの事を詳論せんと欲せば、革新者が己自身の足によりて立てるか、他人の揮によらんとせるかを究明せざる可らず。換言すれば其臣下を用ゐるに好辭を以てせるか、はた權力を以てせるかの問題にあり。第一の場合には通例彼は企畫の遂行を誤り失敗に終るべく、第二の如く已等自身の力をたのみて自由に服従せしむべき部下を有するときは、冒險を試むるの必要なく、成功すること屢となり。聖書に載する所によるにかの土地を回復せんとせし豫言者達が、各自に攻畧の武兵を有せし時は成功し、反之武力を有せずして有難き教への言葉のみ

を有せし時は多く失敗せり。すべて國民に説き薦むるとは容易なれども、之に確乎たる信念を得しむるとは極めて困難なり。故に、人をして信せしめんと欲せば、之をなさしむるに足る丈の暴力を用ゐざるべからざる也。モーゼスやキロスや、セシウスやロムラスや彼等もし無理にも強ひる丈の權力を有せざりせば、新法を行ふこと能はざりしならん。かゝる例は今、僧徒デユロウム、サヅナロラに於て之を見る。フロレンス人が彼を去らんとするや忽ち、彼は己の新法によりて破滅したり。彼は己の意見を確持せしむべき方法を知らず、己に不同意ある徒を拘束する方法を有せざりしが故なり。故にかゝる人のかゝる事件に於て困難に遭遇するは尤なり。この危険は彼等自身の卓越せる才略によりて除かれ、目的は達せられ得べし。一度之に打勝ち、幾分にも民衆の尊敬を贏ち得ん乎。則ち其位置は永久鞏固にして、名譽あり幸福あることなり。

余は茲に一の實例を述べん。以上の如く顯著あるものにあらざれども、幾分この性質を帯び類似するものありて、すべてこの種の代表たり得べき者なり。誰ぞや。シラキユースのジエロ即ち此れなり。彼は匹夫より起りてシラキユース市の君となりしが、これに對し彼は只時機の到來を待ちしのみにて、別一天運を頼みにしたるにあらず。何となればシラキユースは壓制の下にありしかば、彼を其主に選びて此羈絆を脱せんとしたり。而して彼は其主となりて政を行ふに甚だ巧なりしかば、人皆彼を稱賛して、彼は卓越せる徳を有し、性格に於ても王たるに於て一の缺如する所なく、只一の邦國の存せんか忽ち彼は其の國王となりて稱賛せらるべきなりと云へり。ジエロ乃從來の軍隊を解きて、自ら新一軍隊を組織し、從來の同盟を廢して自ら新一同盟を結びたり。斯くて彼は自身の軍隊と盟友とを擁し、其基礎に立ちしかば思ふ儘の行ふことを得たり。即知る彼が之を得る迄には、多大の困

細と勢力を要したれども、一旦之を得るや、之を維持するには頗る易々たりしとを。

四二

第七章 幸運と他人の助によりて得たる君

權につきて

匹夫より起りて一國の主となり、幸運の恩恵によりて君位を贏ち得たる者は其位を得るには困難なかるべし。只位を保つには多大の困難を感ずべし。例へば羽翼に乗じて昇騰したる如く定居を設けて留まらんとするや禍患の襲ひ來る所となる。この種の人は賄賂の行使により、或は他の大なる君主の讓與によりて顯位を得たるものにしてギリシアに於て所々に行はれしが如く、イオニアの數市に於て行はれしが如く、ヘレスポンドに於て行はれしが如し。彼斯王ゲリオスが已

の根據を固め、已の名譽を保たんが爲に操りし所なり。是等の君主の運命は懸りて一に已を上げたる者の意志と運命の力とにあり。然れども他人の意志や運命や有爲轉變のこの世に於ては最も不確實のものなり。即彼等は其位と永續すべき知識も能力もあるとなし。知識なしとは何ぞや。彼等も匹夫のみ、非常に卓絶したる人材に非らざる限り焉んぞ民衆を提擧し號令する所以を知らん。能力なしとは何ぞや、彼等は信賴すべき忠實肱股の臣を自己の配下に有せざればなり。且またかゝる突然として得たる邦國は、其根底の鞏固なるものあらざるが故に暴風の一度襲ふあれば忽ち根こぎに壞倒すべし。是皆自然界に於ける現象なり。但し俄かに成り上りの君主と雖も、幸運の齎らしたる所を己が手に入れたる以上之を固持することの用意にかゝり時機を逸せず、之が永續の基礎を固め得る程に賢明なるものはこの限りにあらず。實力により、又は幸運により、君權を得たる者の實例につ

き吾人の記憶に新なる者の中より其二を擧げん。一に曰く、フランシス・スフォルザ (Francis Sforza) に曰はく、シーザー・ボルヂア (Caesar Borgia) 是也。スフォルザは己の徳により力によりて一市民より起りてミラノ公となり、其之を得るや困難なりしも、永く其位にありて平和を樂しみたる人也。ボルヂアは通常ヴァレンチン公 (Duke of Valentino) と稱せられ、父アレキサンダーの餘慶を被りて數ヶ所の良地域を得て之を保ちしが、父の死するや忽ち之を失ひたり。而して彼精勵ならざりしにあらず、又他人の武兵幸運によりて得たる君主等の己を固むる爲にかすべきあらゆる手段を盡さざりしにあらざる也。是何を以て然るか云ふに、始めに基礎を築かざりしものは、たゞへ上部の結構を壯大に造り得んもその築造に大なる困難の伴ふあり。建物に大なる危険を免れざる也。是の公が將來の基礎を安固にせんが爲に、如何に多くのことをなしたる乎は、彼がなしたるすべての進歩を觀察して以て知る

とを得べし。余は之に就て論ずるを無用のことゝなさざる也。何となれば新しき君主に對しては新君主のなしたる實例にまされる教あればなり。彼がなしたる志こそは、失敗に歸したりと雖其罪や其あしたるがためにあらずして、彼の運の拙かりし爲に歸せずんばあらず。

法王アレキサンダー六世は我子ヴァレンチン公を偉大ならしめんと願切なりしが、然れども其路には現在にも未來にも種々大なる障害の横はれるを見たり。第一彼は我子を進ましむべき地域にして教會に關係なきものは一もあらざることを見したり。而して彼が與へ得べき所に對しては、ミラノ公及ヴェニス人等が同意せざるべきことを知り。何となればフェーンザ (Faenza) 及びリミナム (Rimini) は已にヴェニス人の保護の下にありしを以てなり。又彼察知すらく、伊太利の軍勢、殊に我が命を奉すべき兵は、法王の權力の増大を竊かに恐

れたるべきオルシニス(Orsini)コロナナス(Colonnas)等の配下にあるが故に容易に信頼すべくもあらずと。此故に彼が一部分にても得んには、伊太利國中の全部の同盟を破り、秩序を乱さざる可らず。之をなす難きにあらず。何となればヴェニス人は他の原因より佛人を招いて再び伊太利に入らしめ、法王は之れに反対せず。却て佛王ルイの離婚に同意を與へて之れをして容易ならしめたればなり。かくしてルイ王はヴェニス人の助とアレキサンダーの同意とによりアルプス山をこえて伊に入りミランに至るや、法王がロマグナに對する企に援助を與へたり。即ロマグナは圍まれ而してコロナナスは敗られたり。茲に於て彼は勝に乗じ、其の得たる所を失はざらんとせしに、前途に障害の横はる者二あるを發見したり。一は自己の軍隊の不忠實にして、其二は佛軍の回避なり。其理由は彼が己が配下となりしオルシニの軍勢を疑ひ、之を要する時己を損するとなきか、或は己の勝利を妨ぐるか、己

に勝利を得たる時之を奪ふことなきかを疑ふに至りぬ。而してかかる恐れを佛軍に就ても亦懷きぬ。

フェンザの攻路の後ボログナ(Bologna)の攻撃にあたりて彼がオルジニの軍隊に對する猜疑心は益々増大せしかば、彼等は其攻撃に於て極めて冷淡毫も進撃することなかりき。而して彼がアービンの公國(The Duchy of Urbino)を占有するの後タスカニ(Tuscany)に侵入したりし時、佛王が罷めんとすの要求によりて佛王の意のある所を知りぬ。

茲に於て乎彼は幸運と他人の力に依頼せざらんとすの決心を固めぬ。其第一にとりたる手段は、ローマに於るオルシニ及コロナナの党を弱めんとすの企にして、是等の党派に屬する人士を誘引し、其才幹に應じて或は年金、或は司管、或は命令權を與へるなど、以て己の役に供するの方法にて巧に其企を成功したり。即彼等の党派に對する熱心は數月にしてさめて、皆かの公に向ひぬ。彼の、コロナナを顛覆して巧に成功し

たりしが如く、又オルシニスを顛覆せんと企て、その機會をまちぬ。オルシニスの人々はヴァレンチン公及び教會の増大は我家を滅すものなることを洞察して、ベルデノ(Berardino)のマデオネ(Masione)と云ふ所に會議を開けり。爲めにアービノの反亂を惹き起し、ロマグナの騷動とかり而して百の危険は公の上に来りぬ。然れども彼は佛人の援助を以て之を鎮静したり。彼は已が名聲を恢復したり。然れども今後なほ外國の助をからんことには慊焉たるものあり。佛人と手を切り、シグノル、ポーロ(Signor Paolo)の斡旋によりて再びオルシニ家に和睦することを得たり。彼は此の結合維を持する爲にはなさざるなかりき。黄金、布帛、良馬を送り、彼等をシニガグリアの地に誘ふて、以て已が手中に落ちしめぬ。

此手段を以て、彼は已に抗する者の權力を殺ぎ、ロマグナ及アービン公等を贏ち、民衆には將來の幸福をほのめかして巧に其人心を收攬せ

り。而してこの點につきては、摸倣の價值なしとせざるが故に數言を費すこととせん。

公がロマグナを已の所有とせし時、こゝを治めたりし前の主は拙劣なる人にて、民を正しうするよりは自ら盜をなせしが如き有様なりしを以て、平和ならしめたりと云はんよりは、寧ろ騷動の機會を興へたりしかば、其國內は從て窃盜、蜂起、其他あらゆる倨傲の行に至らざるなかりき。公は之を王政の下に相和して康らかしむるには良二千石を送るに如くはなしと思惟して、レミロ、ド、オルコ(Remiro d'Orco)に絶對の權力をもたせて知事に任じぬ。而もオルコは殘忍の人にてありき。オルコは間もなく之を鎮めて大に名聲を轟かしたり。後に至りて、公思へらく、かゝる大なる權力は民の恐るゝ所とならんと。則ち裁判所を州の中央に設けて、各市には辯護人を置き、卓越せる人物をして之を管轄せしめたり。又彼が過去の峻烈なる行爲によりて多くの敵をつく

りたればこの悪評を除去せんが爲に、又人民の愛敬を得んが爲め若し
殘酷のことある時はこれ已より出づるに非ずして部下の官吏より出
づることを示さんと努めぬ。彼はこれを更に明確に示さんが爲に、殘
酷の官吏の誰なるやを知らしめ、一日これをセセナ(Casena)の市場に於
て首を刎ねたり。一方よりは木製の刀を以て一方は鈍き刀を以て之
を斬りぬれば、見る人はその恐ろしさに呆れてありしが、又以て人心を
鎮むることを得たり。公の強勢今や以て目下の如何なる危害も恐る
ゝに足らずなりしかば、己の近隣の力も殺ぎ、己に反抗し得るものは全
く無きに至らしめぬ。勝に乗じて尙ほ侵畧せんとすれば、勢殘る所は
佛蘭西ある耳。此國を窺ふ故なきにあらず。佛王の彼を妨ぐるあら
んるを恐れればなり。彼茲に於てか彼に同盟を締ふべきものを國
外に求めぬ。而してゲエタ(Capeta)の地を圍みたるスペイン人に對し
てネーブルス國に佛蘭西の軍隊が入りし時、彼は佛に對して曖昧の態

度をとりのぬ。彼の計畫は佛に對し己を安固にするにありき。もし父
のアレキサンダー生存してゐるならば、彼は確に之をなし遂げしならん。
斯の如きは彼が切迫せる危険に對する備へなりき。而して危険の遠
くにあるものに對しては何等確乎たる備を有せざりき。彼が第一に
恐れたるとは、法王が彼の敵とならんとなり。而して父のアレキサン
ダーが與へたる所を再び褫奪せんことなり。彼はこれに對して實に
四つの計畫を立てたり。第一、彼が掠奪したる地の主を勦絶し其族を
盡して法王の再興に由なからしむるなり。第二、ローマの貴族に阿諛
して己が党に引き入れ、これによりて法王に恐怖を懐かしめ、之を牽制
せんとするにあり。第三、大學を己の味方に引き入れんとするにあり。
第四は父の生前に於て、充分に強く己の足によりて立つことを得て若
し彼に向つて暴行をなさんとするものあらば、直に之を打ち倒すにあ
り。この四つの方法中第三までは父の生前己に之を試みたり。而し

て今や第四を完成せんとする時に當りて父の死に逢ふ。彼は掠奪して彼の手中に落ちたるすべての主を殺して、只極めて少数をのこしたり。彼はローマの貴族に倣媚し、又僧侶の學校に於て己の党派をつくりぬ。又自家を鞏固にするにつきては、巴をタスカニーの主となし、ベルヂア (Perugia) ビオムビノ (Piombo) は己に之を占有し、ビザを其保護の下に置けり。而して彼は更に佛蘭西に目をつけたり。(フランスはイスパニア人により、ネーブルス王國より撃退せられ、且兩國とも互に和親を結ぶべき必要を見るに至りしなり) 彼は唐突としてビザに入りたるに、やがて、ラッカ (Lucca) 及シーンナ (Siena) は一部はフロレンス人を惡むの心より、一部は恐怖心より服従したり。フロレンス人は救はるべき望の網絶えはてぬ。若しこのとが以前に起りしならば、以後は己自身の力と行爲とによりて立を得る丈の名聲と實力とを得たらんこと必せり。而して外國の同盟にも天運にも依頼せずすみしなら

ん。然るに父王は其子が武器を取りてより僅かに五ヶ年にして死したれば、其死後、彼が確實に保ちしものは一のロマグナを外にして何者もあるとなし。他は皆空中に浮べる如き状態にありき。而して恐るべき二強敵の間に介在して、彼自身は頻死の大患に呻吟せりき。公は思慮に富み且つ大度ありき。如何にして人に媚びて業を遂ぐべきか、如何にして人を亡ぼすべきかを極めてよく了解したり。是彼が忽ちにして主權を得たる基本なり。もし彼にして後に二個の大なる敵軍を控えず、又自身疾患の襲へる身ならざりせば、恐らくは其企てを完成したりしからん。彼の築きたる基礎は稱賛すべきものなりき。このことはロマグナに於て彼の臣下の忍耐力強かりしことによりて明かなるに至れり。ローマに於ては半死の状態にありしが猶安全を保てり。バグリオニ党 (Baglioni) ヴィテルリ党 (Vitali) アーシッリ党 (Ursini) などはローマに入りしが彼れに反對するものを生ずるに至らざり

き。皆以て彼れが築きし基礎の鞏固にして抜くべからざるところを證するに足る。

五四

彼が己が味方として願はしき人を法王となすの力は有せざるも、彼が敵視せる人物を法王の位の外に置き得たることは有り得べきことなり。もし幸にして父のアレキサンダーが死する時、彼もし健康なりせば萬事は其意の儘の如くなりしならん。ジュリアス十一世が法王になりし頃、彼自ら余に告げし言に曰く、余は父の死するや如何なることが余の身に起り來るべきかはよく考量したり。而してこれに對する策を案じたり。只其死に次て自己の死の來るかとも早からんと思はざりき。

ヴァレンチン公の行爲を嚴肅に検査する時、毫もその責むべきものあるを見ず。否寧ろ、幸運の恵と他の君王の洪助とにより、位に上りたる彼と境遇を同じうする人の、模倣すべき實例を示したるものと云ふ

べし。何となれば彼の胸臆や斯の如く大にして、其金や斯の如くそれ高し。彼はそのなしたる以外なすべきの道なかりし也。又何ものも其の大なる心と高き企てを妨ぐるゝ能はざりき。若し強ひて求めなば、彼の身體の羸弱と父の死と是のみ。

彼の領土は狭小なりしが故に、敵に對して身を安固にせんには盟友を得ること必要なりと思惟したり。暴力によると、術策によるとを問はず。打ち勝つことを必要と思惟したり。民衆に愛せらるゝか然らずんば恐れらるゝことを必要と思惟したり。己の兵士の服従し且己を尊敬すべきを必要と思惟したり。己に害を加ふるものを滅亡し之を剿絶するを必要と思惟したり。舊法を破壊して新法を建設し、峻嚴感謝、大量寛容にして。彼に不忠實なる兵士はこれを黜け、新しきものを取り。彼が結びし同盟の君主等はすべて彼を賞賛するか或は彼の意を害せんことを恐るゝやうに巧みに身を處すること。是亦必要な

りと思惟したり。讀者よ、是れ全じ境遇にある人がこれに優れたる模範を見出すこと能はざるならん。

もし彼のかしたることにつき非難すべきことあらば、そは彼がジュリアス十一世の法王に選ばるゝに任せて顧みざりし一事ならん。是甚しく彼れにとりて損失たりしあり。何となれば彼は已の味方の者を法王に上らしむる丈の能力こそ有せざりけれ。已の敵を法王に擧げざらしむることはなし得べかりしを以てあり。故に彼は以前に我が意を害したる如き僧侶、又は法王となりて後に彼に猜疑心を挿むならんと思はるゝものゝ選ばるゝに同意すべからざりしなり。何となれば人は憎悪によりて悪心を起すと全じく恐怖によりても全じく害心を起すものあればなり。

彼の怒に觸れたる高僧等は他にもありたるが、セント、ピーター (St. Peter) ロノン (Collonno) セント、ジョージ (St. George) アスカニアス (Asc-

anus) 等なりき。是以外のものは縦ひ法王の位に昇ることも、彼の威を恐るゝものにして、只然らざるは、イスバニア人の高僧、ロウン (Raun) の高僧とのみなり。前者は義理上より、後者は佛王と親善關係ありしを以て威氣高きものあり。是の故に公は右の二者の何れかを法王にあげざるを得ざりき。大身がらの人にあつては、新しき恩惠によりて、舊き怨恨を忘るゝと思ふは、誤にして、即ヴァレンチン公がジュリアス十一世を法王に選びたることは、彼の滅落を招きたる大なる誤なりしなり。

第八章 奸悪不正の手段によりて權勢を得

たる國君等につきて

一 平民より身を挺して國君となるに、天運によらず、さりとて己の力にも徳にも由らざる方法二つあり。余はこゝにこの二を論ずべし。但し共和國のことを詳論するにあたり、其中の一は更に細かに取扱ひ得べし。

二つの方法とは何ぞや、一は不法惡辣なる手段によりて君權を得るなり。二は、一市民が一味徒党の偏頗心僻愛によりて一國の主となる場合あり。

余は本章に於て第一の方法につきて、二個の例証をあげん。一は古きもの、二は新しきもの。然れどもこれを學ばんことを欲する人には

充分に明瞭なるべきが故に、更に歩をすゝめて論ずることをなさざるべし。

シシリア人なるアガソクリス (Agathocles) は單に匹夫の身なるのみならず、卑賤なる状態より身を起してシラクユースの王となれり。其の父は一陶工なりければ、彼は幸運につれ身次第にのぼると雖、昔の放縱なる生活を改めざりき。而かも彼の不埒なる行には勇氣と活潑を伴ひしかば、彼は身を戰に投ずるに至り、戰により又勵精により遂にシラクユースの將軍となりぬ。この職になりてより、國君たらんと決心の臍を固め、他人には何等負ふ所なく暴力に訴へて位を篡ひ取らんと決心したり。彼れ乃ちカーセージの一將としてシシリー島にありしハミルカー (Hamilcar) に謀り、一朝邦家の重大問題を議するが如く裝ひて國會を召集し、豫め示し合せ置きし合圖の下に盡く諸兵を呼應せしめてすべての議員及び人民中の富豪をば殺戮したり。この虐殺の後

彼は何等の妨礙なくして王權を篡奪したり。

六〇

其後彼はカーセージ人との戦に敗るゝこと再度に及び遂に包圍の裡に陥るに至りしが、已の軍隊の一部を残し置き、餘を率ゐてアフリカに渡り、萬事の處理宜しきを得たりければ暫時にしてシラキュースを援ひ、カーセーヂ人をして危急の地に陥らしめ之をしてシシリイを捨て、アガンクリスの手に渡し、已ればアフリカを以て満足せざるを得ざるに至らしめたり。

彼の行爲性質を攻査せる者は、彼れが毫も幸運に待つ所なかりしを知らん。始め彼の身を立つるや幸運の子なりしが故に非ず、幾多の艱難辛苦をなめて、戦陣の間に奮起して政府を取り、後幾多の勇武赫々の功を以て之を保ちたりしなり。然れども彼の同胞たる市民を殺戮したる、其友を賣りたる、其忠信の心なき、慈悲の心なきはた宗教心を有せざる決して徳行の人と謂ふべからざるなり。斯の如くにて或は帝國


を贏ち得べきも而かも光榮、聲譽と云ふべきものにあらざるなり。然れども若し彼れの才能を考量せん乎、其危険に遭遇し之に打ち勝つゝの熟達せる、其逆運に處して之に堪え、覆壓するの勇壯なる、之を有名なる將軍に比して劣れる所以を知る能はざるなり。然れども彼が際涯を知らざるの殘忍酷薄、人道に背きし蠻的行爲、其他凡百の悖徳は彼を最もすぐれたる人士の中に數ふることを許すべからざらじむ。

是の故に、彼が終生の事業を取り來りて之を幸運又は徳行に歸せんは其當を得ざるものなり。彼は是等の何れにも由らずして彼自身に之をなしたるなり。

今日に於て、アレキサンダー六世の法、王政の下に、オリヴエロット、ダフェルモ (Oliverotto da Fermo) あり。幼少の時父母の手を離れ、母方の叔父デョーンフォグリアニ (John Fogliani) の下に人となりしが、叔父は若冠の時之をポオロヴィテリ (Paolo Vitelli) 配下の一兵士に送り、其訓育に

よりて一方の將となり得るの才を得せしめんとせり。ボオロ死するや其弟ウイテレゾ (Vitellio) の下に仕へ其才能の鋭敏と其勇氣の凛々たることによりて擢でられて一部の將となりぬ。然れども己が才幹を以てして他人の下に仕ふるは屑しとする所にあらずとなし、自國の自由ならんよりは寧ろ其奴隸的ならんことを願へるフェルモ市民の或者と徒党を組み、殊にウイテレゾの助けを得てフェルモ市を圍まんことを計り、これを遂行せんがため、彼は叔父デモン、フォグリアノに書を送りて曰く、『故郷を辞して父老を見ざると久し、乃ち我が郷と我が愛する叔父を訪ひ、我が嗚々の聲をあげし地を得んことを思ふ。我歳月を費すこと徒爾ならずして、幸に今や故郷に錦をかざるの企を起せしが故に、希くは我友ある百の騎と其の部下の市に入ることを許されよ。而して然るべく歓迎せられんとを乞ふ。何となれば是れ只我一人の名譽なるのみならず、又我を育てし我叔父君の名譽なればなり』と。

叔父のデモンは、彼を歡待せんとの用意をつとめ、盡さざる所なく、フェルモの市民にも彼を迎へしむべく準備し、彼をば我家に請じぬ。彼其家に留まること數日、其計の遂行に必要な準備をこゝのへたり。彼は一日盛大の饗を張りて、叔父のデモン、フォグリアニ及市の重立たる人々を招待しけり。宴の終らんとする頃ほひ、客皆互に興せる時かゝる場合にありがちの如く、彼は突然起ちて眞面目なる面持にて、法王アレキサンダー及其子シーザーの偉大にして、又其なすことの雄大なることにつきて演説を始めたり。デモン其他の人々は彼が述べし所につき自由に答へつゝありしが、オリヴェロットは微笑を洩しつゝ、語るらく、是等の點は更に深く私かに議論を要する所なりと。乃一室に移りしかば、デモンも其他の人々も之に従ひ行けり。彼等が室に入りて席に着かんとするや、否や、豫て匿れ居たりし兵士どもぞかくと物かけよりあらはれ來りて、彼等を殺戮したり。叔父も亦其中にあり



て毒刃に斃れぬ。殘虐の果てし後オリゲロットは汗馬に鞭ち市中を馳驅し重立ちたる役人共を各々其の家に取り圍ましめ限なく掻き探しぬ。かくて市民は皆恐怖して降伏せり。乃ち彼は新に政府を立て、已れはその主となりぬ。不満を懐ける者は之を死に致し、彼に害を加へ得る程のものは悉く之を殺しぬ。新たに文武の律令を定めて已の安全を固めければ、一ケ年の間に彼はフェルモ市にありて已を固め得たりしのみならず、周圍諸州の畏怖する所となりぬ。かくの如くなりしかば、彼もしシーザー、ボルデアの計略にかゝりて、アーシニ家グイテリ家を圍みし時シニガリア (Siniqalia) に於て欺瞞せらるゝことなかりせば、其攻略し難きとアガツクリスと相ひ若く者ありしならん。彼は叔父を弑して一ケ年の後にシニガリアに於て捕へられ、彼がこの智この才と、この奸諂とを學びし其師グイテロゾと共に絞殺に處せられたり。

人或は、アガツクリスの如き、酷薄殘忍暴戾人道に背きたる行をなしたる人が自國に於てかくも永く平隱無事に國を治め、外敵に對しても國防宜しきを得、臣下の中一人として戈を逆にしてこの惡逆無道の主に向つて弓を彎く者なきは、不思議なる現象なりとなす者あらん。餘人を見よ、殘忍の故を以て、戰亂の時は云ふに及ばず、平時に於ても已の政府を擁護し能はざる者比々皆然るに非ずやと云ふものあらん。余は信ず、是の如きは殘忍を用ゐる方法の善良なると拙惡なるさによるのみ。殘忍の行爲を善良に適用する(もし善良なる語が惡き行に對して用ゐらるゝとせば)とは、殘忍を行ふと只一度に限り、而してそれが自己の保存上必要な場合に限り後再びすることなく、又出來得るだけ民の爲を思うて爲されたる場合をさす也。惡しく殘忍を用ゐるとは、其始めに於ては甚しからざれども次第に其度を増して毫も減少することなきを云ふ。

第一の場合の如きを犯せる者は時として、神人ともに之を助くる時なきにあらず、アガククリスの如きは其例なり。第二の方は永く存立すること能はず。是の故にこゝに注目すべきは或邦國政府を篡奪せんとする者は、あらゆる残酷を一時に遂げ實行すべきとなり。因て以て彼が残忍の行を屢するの必要なからしめ、これを停止することによりて民を和らげ、己の味方に引き入れんとに勉むべし。之れに反するものは、常に刃を手に用意し居らざるべからざるなり。何となれば、己の臣下に何等の信用を置くこと能はず。又一方には臣下は君主が絶えず次ぎ／＼に残忍の行あるを以て安心して居ること能はざればなり。故にすべて残忍の行爲が一時に行はるゝ時は、人民は之を味ふと淺くこれを忍み惡むことも従つて減少せん。而して恩澤は滴々として垂れ出づる故に、其の有難さは次第に感せらる。就中國君は前以て臣下に對する一定の方針を立て、天運の如何によりて變更するこ

となきやうにすべし。然れば一たび惡運の襲ふ所とならんと、苛酸の手段を行ふの機會なかるべく、又善事をなすと雖、己むことを得ずして爲したるが如く見ゆるが故に、民之に向つて感謝することなかるべく、君民の間終始一の如へ正々堂々として政治を取り得べきなり。

第九章 民選邦國につきて

前章に於て第二の場合を論ずることを殘し置きたれば、余は之を本章に於て叙述すべし。一市民が奸計によるにあらず、又甚しき酸酷を以てせるにも非ずして、其國の君とならしめられたる時は、之を民選邦國 (Civil principality) と稱し得べく。而して是は徳又は幸運のみにて到達せらるべきものに非ずして、巧妙敏慧なる伎倆によりて達せらるべきものなり。記せよ此人や、市民又は貴族の寵幸によりて政權をと

れるものなり。何となれば、凡べて市に於て、上流のものと下流のものと互に其氣風を異にするが故に、普通の人民は、司配せられ、壓迫せらるはとを好まず。而して大身がらの人等は、これをなさざれば満足せざるを以てなり。この欲望の異同よりして、起り來る所の結果三あり。曰く王政。曰く自由。曰く放肆。即ち是れ也。

王政の起るや人民の側よりし、又貴族の側よりす。この二者は各其機會を有するものなり。貴族等は人民等の澎湃たる壓倒に抵抗すること能はずして、數々全体一致して一人を選び、之に政權を授けて己れ等は其保護の下に平穩無事を希ふものなり。人民の側に於ても貴族等より壓倒さるゝ時には、全様のことをなして己等の中より一人を選民之に全權を授けて以て、貴族等に當らんとするなり。貴族によりて擁立せられたるものは、平民の擁立したるものに比して、其權力を保つに更に一層の困難あり。何となれば、其の周圍には舊來の關係を有す

るものありて、己等も亦彼と全等のものなりと思惟し、彼が意の如くに指圖し取扱ふこと能はざるを以てあり。然るに人民によりて選ばれたるものは、己と比肩すべきものなく、殆んど獨立獨歩の姿なり。而して皆彼に服従せんことを思へるもののみにして、然らざるものは殆んど稀なり。加之貴族の徒は他に害を及ばさずして、殆んど満足することなきに對し、平民は然らず。平民の計畫は貴族等のそれに比して一層合理的なり。何となれば、一は命令すると壓迫するとの二つを以て主意とし、他は只防禦と自己の安全を得んが爲にするものなればなり。次に考ふべきは、平民等が反對する時は、其數の過大なるがために、國君の安全なりがたきに反し、貴族等の數はしかく大ならざるが故に、其れ等が反對すとも、國君は比較的に危険なることなし。國君にとりては、激發せられたる人民等は、單に君をすて去るのみあれども、若し貴族等の憤るや、君を見捨てるのみならず、陰謀及徒黨を組むものなり。貴族

なるものは、更に小心更に狡猾にして、機を見て己等の安全を計らんと
して確かに成功するならんと見込める人とは常に利害の關係を造ら
んとしつゝあるものなればなり。

次に國君は常に全一の民衆を味方にし其擁護を被れども貴族に就
てはかくの如きことなし。何となれば貴族なるものは國君の意のま
ゝに或は其位に列せられ、或は位階を奪はれ進めらるゝも黜けらるゝ
も國君の自由なればなり。

この點につき更に新たに説明せんが爲には、是等貴族等を二個の方
面より考へざるべからず。即ち彼等をして全然君主の幸運と利益と
に依頼する様に司配すべきか否かを考へざるべからず。國事に執掌
し全身をこれに献け居るものは、貪欲ならず從て賞すべく取るべきな
り。これに反し懶惰にして國君に身を寄するの心固からざるものは
通例二つの動機よりこれをなせるあり。怠惰又は恐怖心に基けるか

或は野心を包藏し企て計る所あらんとするか是れなり。是君主の爲
を慮るよりも己等自身の利を計ること強烈なるものなり。第一の怠
惰恐怖に基ける場合ならばなほ職にあらじめ得べく、殊に才能に長じ
智謀の士ある場合に於て然りとす。これによりて國家の發展ある時
は彼等は君主を稱揚すべく若し國事非なるときも君主は彼等を恐る
ゝの要なきなり。

是等の人物に對して國君は彼等を秘密なる敵人として見るべく、非
常特別の注意を拂はざるべからざるなり。何となれば國君の困難に
臨みては彼等は君を前方へつきすすめて其の亡滅せんことを努むべ
ければなり。人民の人氣を一身に鍾め其投票によりて國君となりし
者は、人民を己の味方として保護せざるべからず。凡そ人民の望む所
は只壓迫より逃れんとするにあり。君主の之をなす易々たる耳。然
れども普通民の意志に背き貴族の利益關係によりて國君に選ばれた

るものは就中人民の意志に迎合せんとに努力せざるべからず。是とも人民を保護しきへすれば極めて易々たる耳。而して悪しき取扱を豫期せしに反し、良き取扱を受けたるものは、非常に感謝すべきと全く人民に反して國君となりしものが恩恵を施すときは非常に其の恩恵に感じて益忠實の臣となるべし。

民の意を攬るの術は種々雑多にして、事情によりて定まるものなれば、一定の法則を挙げ難きが故に余は之を論せざることとせり。只余は斷じて言はん。凡そ國君たるものは努めて民の心攬りに、之を失ふとあるべからず。然らざれば一旦不幸不運の襲ひ來らんか、彼れは遁るべきの途を知らざらん。

ナビディウス (Nabides) は、スパルタ人の國君にして、すべてのギリシア人に勝ちほこりたるローマ人の軍隊を支へ、よく己の政府家國を擁護したり。而してこの大功を遂ぐるに只少数者の陰謀に對して己を安

全にするを以て充分なりき。然るにもし民衆皆彼の敵なりせばこのと遂にならざりたらん。「民衆の上に築くは砂上に築くなり」との古き言を引き來りて余の斷言と爭論することなからしめよ。もし單なる一平民が私の資格にて民衆の上に依頼する時は、然あるべきこと尤千萬なり。人民が上政府又は敵の壓制をのがれんとして人民の助に依頼せんば、忽ち空頼みとあるや必せり。古來その例證に乏しからざるなり。ローマのグラッキ (Gracchi) フローレンスのチエオルヂスカリ (Gegorio Scalli) の如き即ち是なり。然れども、民衆の上に築く所の國君にして、如何に號令すべきかを知り、勇氣ある人にして逆運に喪心せず、亦他の用心に於てもおさく、怠らず、彼が勇氣と行爲とは以て民衆の意氣を軒昂たらしむる如き人ならば、民衆の彼を去ること決してなく、又彼れの基礎を安固にするを得べきなり。

この種の國家に在りては、國君が突然蠻勇を振ひて一躍して民選の

七四
制限的狀態より移りて絶對王政の主權に至らんとする時は、極めて動搖不安定のものとなるなり。蓋し此種の國家に於る國君は自ら命令し自ら行動するか或は官吏によりて之を行はんとするか二者其一を出でず。後の場合に於ては國君の權力は弱くして且つ不安なり。蓋し萬事が官吏の意のまゝに決定せらるゝが故なり。其主宰の官吏なるものは國歩困難の時に於ては、國君の命に従はざるか、或はこれを蔑視して顧みず、以て位を篡はんと易々たるものなればなり。斯る種の君主は困難の時に當りて、急に專政絶對君主權を立て得るものに非ず。蓋し其官吏にして彼の臣下なる物は主宰官吏の權を行使するに如れ。官吏は民衆の上には多大の勢力を有し、專政君主の命に従ふが如きとなからしむればなり。かゝるが故に、國君は平和の時に於て其臣下が只治らるゝが儘に甘じて、君の爲には身命を惜まず仕ふる時の心持にて、困難の際にも此くあるべしと思ふは大なる心得違ひなり。國

步艱難の時に於ては忠實なる人民は只筏かを數ふるのみにして難破船を援ふ時の如くに敢て自ら進み出づるもの多からず。
それ然り故に智謀に富み賢慮深き國君はすべての時すべての場所すべての場合を通じて、人民をして、汝の執政、汝の政府を必要なりと思惟し、終始一貫、必ず忠實誠信ならんことを誓はしむるやうに、國家の梶を取り行くべきなり。

第十章 王政の権力を見積る法

七六

王政の性質を試し見る人には國君が艱難に際して特立獨行なし得べきか、はた他の人々の援助擁護を要するかは、思量すべき價值ある問題なり。

この問題を少しく明瞭ならしめんが爲に、余は思ふ、國君にして部下の民多きを以て或は其富力を以て完備の軍隊を設け、侵入し來る如何なる敵に對しても、刃を向け得る者は、即ち統領の資格ある者にして戰場に於ては敢て自ら進んで敵を攻撃せず、只己の柵にとち籠りて出來るだけ巧みに防禦せんとするものは、是獨立の國君たり得べからず。前者につきては余は己に之を述べたり。故に又機もあらば説くことあらん。後者につきては、己が國內の首都の城塞を堅固にしてまた城多の事を以て己れが意を勞すること勿れと勢付くるより外あら

ず。而して城を高くし堀を深くして、内には君を愛する民を有する都市を侵襲することは容易の業にあらざればなり。

獨逸國內には自由都市多し。而してこれに屬する所の地域は最爾たるものにすぎざれど、皇帝に服従するは只自己の氣に適せる時のみ。而して其皇帝たるは、國內の地の侯伯たるを問はず、それらに對して毫も危懼の念を懐けることなきは何ぞや。蓋し自由都市なるものは皆よく城砦を以て固められ、是等自由都市を奪ふを以て、最大困難の事業となさざるものはなく、其壁は高く、其堀は深く、其築造は規則正しく、而して砲は良く備へられ、彈藥糧食は一ケ年支ふべき貯を藏し、加之平民の活計を立て、滋養物を缺かざらんが爲には、工作場の備へありて以て一般の迷惑とならざらんやうにせり。工作場に於ては、貧民が勞作し年を通じて業の息む時なく、以て生活の資を得、軍隊的訓練の嚴格あるあり。良習と善法律の維持さるゝあり。是等の條件は皆以

て其都市を保つべきなり。

よく堡砦を築かれたる都市と己を愛する人民とを有する君主は容易に他人に侵さるることなし。若し之を侵すとあるも必ず悔ゆることあらん。何となれば如何なる軍隊と雖も何等の故障もなくして十二ヶ月の間一都市の前に無事に待ち伏せせんとは不可能のことなるを以てなり。或は言ふものあらん。人民は城外に有する家屋地面などが掠奪せらるゝの恐あり。爲に君主を去るの患なきかと。余は答へて云はん。智謀に富める君主は是等の困難を除去すること方寸の中にある。他なし、かゝる苦情の起らざるやう、禍根を直ちに絶つべければ、今暫し辛棒すべしと人民の希望を喚起し、或は敵の醜酷を知らしめて之を恐れしめ、又は自身最も残忍にして大膽と思はる如き方法をなすなど嚇したり賺したりなどするにあり。

加之、敵が普通に行ふことは、掠奪と放火なり。この時各人の心は激

昂して皆防禦の上に注がれつゝあり。故に君主たるものは、我が身を煩はす要なく、又これを恐るゝ要なし。何となればこれらの暴舉やみ不便利なることも亦舊に復すれば則ち民は冷静に歸り、事物を眞面目に思考するに至り、以前より君主と親密に團結するより外途なきを發見するに至ればなり。人民は已等の家屋を兵火の犠牲として君主の防禦につとめられたれば、君主のために恩恵を被らしめたりと思ふあるべし。而して人の天性は、人に恩を施せば、それと全じ程の恩を被りたると同く其人との聯絡を保たんとするものなり。かゝるが故にすべてこのことをよく考察する時は、君主が臣民の愛情を繋ぎ永き包圍に忍耐せしむることは、決して難きことにあらざるあり。但だ糧食と擁護の方法とを有するを要するのみ。

第十一章 法王政を論ず

八〇

茲に王政につきて論ずべき問題の残れるは法王政あるのみ。ローマ法王の政權たる、これを得るは、徳能と幸運とによるに非ざれば、能はざるが故に頗る困難のこととす。然れども一旦これを贏ん乎。其政權たるや古來傳承して遍なく遵奉せられたる基督教會の偶像上に安座せるを以て、又教會の勢力や權威や優に法王をして其高位を保たしめ得るものなるを以て、法王が之を保つ何の難きことかあらん。彼が云爲行動只彼が意のまゝたらんのみ。土地を有して之を防禦することなく、臣下を有してこれを治めざるもの、只法王あるのみ。而かも其防禦せられざるの土地は奪はるゝことなく、其顧みられざる人臣にして満足せざるなし。故に法王の政權たる、凡そ世界に於て最も幸福にして最も安全なるもの也。超越的權力によりて處理せられ、人智工夫

の上にあるものあり。余はこのことにつきて更に多くを云ふことなかるべし。何となれば、神自身によりて始められ、繼續せられたるものなれば、人にして之を論ふことは擅行の沙汰と云ふべければなり。然れども人あり、問ふて曰く、如何にして教會がかくも高き位置を世上の事件の上に有するに至りしか。法王アレキサンダー六世に至るまでは伊太利の法王と雖も世上の權力に於ては地方の小貴族位のものに過ぎざりしに非ずや。而して今や佛蘭西王に抗立してこれを恐れしめ、これを伊の國境より拂ひ、又ヴェニス人を滅す程の勢力は抑如何にして得たるかと。其理由や已に明なるものありと雖、少しくこれについて記憶を新たにす所あらん。

佛王チャールス八世の伊太利に侵入する以前に於ては、この國は法王、ヴェニス人、ネーブルス王、ミラン公、及フロレンス人等の治下に分れたりき。佛王の侵入によりて是等の主權者等は二つの点に眼を注

ぐに至りぬ。一に曰く、如何なる外國の兵と雖この國に入るべからず
二に曰く、彼等自身互に他を侵奪することなかるべしと是なり。而し
て是等の諸強の中、最も注意警戒の標的となりしものは、ヴェニス國と
法王となり。ヴェニス國を抑制せんがためには諸國盟合して恰もかの
フェララ (Ferrara) の防禦に全力を盡したる如く、力を惜まざりき。法
王の權力を縮少せんが爲には、ローマの小貴族等を利用せり。彼等は
二派に分たれて、オルシニ、及コロンナの二派にして常に相争ひ、彼等の
武器は常に注王の面前にありき、爲に法王權をして微弱のものたらし
めたり。時に或はセクスタス四世 (Sixtus) の如き勇氣に富める法王の
出でたることあるも、其智謀勇敢と幸運とを以てして、なほこの困難よ
り切り抜くること能はざりき。彼等が位に居ることの短きこと又其
一因たり。彼等の保ちたる最高限たる十ヶ年を以ては、兩黨の一つを
も壓服するには足らざるなり。コロンナ黨の殆んど倒るゝや、新たに

一派起りて、オルシニの敵となり、コロンナを再興したり。内部にかゝ
る争鬭分裂のありしことが法王をして伊太利に於て一層恐るべきも
のたらしめざりし原因なり。この後アレキサンダー六世の法王の位
に昇るや、法王が金銀及權力を以て如何なることを爲し得べきかを最
も明瞭に指示したり。佛王の侵入を機とし、我子ヴァレンチン公を利
用してさきに述べし如きことを大胆に行ひたり。彼の目的はヴァレ
ンチン公を強大ならしむるにありしが、其實教會をして擴大ならしめ
たり。即ち彼及ヴァレンチン公の死後、彼等の得たることがすべて教
會の有となりたるなり。

彼の死後、ジュリアス二世つぎたるが、この時すでに教會は益々榮え
んとする状態にありき。即ちロマグナは其領有に歸し、アレキサンダー
の効によりローマの小貴族等は己に境外に出されて權勢なく、其黨派
は抑壓せられたりき。加之益々盛大に越くべき途や、又金錢を貯ふべ

き途も開かれたりき。是に於てデリアスは之を利用し、ボログナを征服する耳ならず、ヴェニス人等に君臨し、佛人を國境の外に驅逐せんとの考を懐きぬ。是等の大計畫はすべて成功したるが彼が得たる所は毫も之を自己の財産とすることなく、すべて之を教會に寄附したれば彼の名譽は又從て増大せり。彼はコロンナ黨及オルシニ黨を舊のままに保ちたり。而して彼等兩黨は互に不和なるべき原因ありしと雖も、而かも平和の状態にありし所以如何といふに二の原因あり。一は乃ち教會の權威の大なることにて彼等はこれを恐れたればなり。二は高僧即ち謂ふ所の君牧師 (Cardinal) を有せざればなり。蓋し君牧師は常に騒動の原因なり。君牧師はローマ外の黨派を煽動し、貴族等は之を防禦せざるを得ず。従つて高僧等の野心が原因となりて、貴族等の間に不和争闘のもち上るものたればあり。

今の法王レオは、幸に教會が已に最も権力ある時に位にのぼりたれば

ば其祖先が武器によりて、之を偉大ならしめたるが如くに、已が徳と言行の敦厚なることによりて、益々之を尊敬すべく光輝あるものたらしめんこと望まし。

第十二章 軍隊の種類を論ず

余は最初に計畫せし通り、種々の王政につきて論じ、其種類より其體成の良否如何の由つて來る所以を論じ、次に之を獲得し之を維持する手段方法に就て論じたり。更に進んでかゝる際にあらはれ來る攻撃防禦のことを概見せざるべからず。

吾人はさきに君主は其基礎を鞏固にするは單に願はしきとたるのみならず、又實に必要なことたるを論じ、然らざれば瓦解滅亡を免れず

と云へり。

其國の舊きと新しきとを問はず、又新舊混合のものたるを論せず、すべて邦國の主要なる基礎は實に善良なる法律、善良なる兵備にあり。良き軍備なき所に、よき法律のあるべき筈なく、良き軍備ある所必ず良法律の存するものなるが故に、余は法律につきて論ずることを省き、直ちに軍備につきて論せんと欲す。

國君が已の邦國を擁護すべき所の軍備は、已自身の軍隊なるか、傭兵なるか、外國の援兵なるか、はた混合兵なるかなり。傭兵と援兵とは不利にして、且つ危険なり。而して傭兵の力によりて、已の政府の繼續を得る如き國君は、決して鞏固安全なることなかるべきなり。蓋し傭兵なるものは、團結なく、野心にみち、訓練を缺き、不忠實にして、已の味方に倨傲にして、敵に對して卑劣に、神を恐れず、人を信ぜざるものなればなり。是の故に、彼等に依頼する人の敗滅は、只攻撃の時迄延期せらるゝ

迄のとして、軍を動かさんとするや、忽ち身の敗滅を來さんと必せり、彼等は平時に於ては、汝に離れ、戰時に於て汝を捨て去る。其故何ぞや、彼等は汝を愛するにあらず、又何等の訓練あることなければ、戰場に於て彼等を保つべき名譽心を有せざるを以てなり。彼等は只貨錢の爲に働くものにして、汝の爲に一命を捨つる迄に、強き考が彼等を司配し居るとなきあり。汝が何等命すべき用なき時には、彼等は實に優れたる兵士なり。然れども一度戰役のことを告げんか、彼等戰爭の始まる前に隊を去り、又は戰場に於て逃亡すべきなり。

之を證する決して難きにあらず。見よ。伊太利の滅亡は其原因する所他なし。只傭兵に倚頼したるにあるのみ。傭兵は其の始めの中こそ、或特定の人に對して優れたる用をなしたれ。彼等仲間同志にも折合よく行動したれ。然れども其外敵の攻撃を受くるに至るや、忽ち本性を露はしたり。此点を洞察して、チャールズ七世は伊太利侵入を

計畫したるなれ。而して伊國の敗は其基く所敵にあらずして、内部にありと喝破したる人の言は實に當れり。然れども其原因は彼が信じたる如き缺陷にあらずして、余が指摘したるものに非んばあらず。國君にして此過失を行はんか。其報いを受けざる能はざる也。然れども更に要点に接近して、傭兵の不完全なる所即其弱点を、更に明瞭に示すこととせん。

是等傭兵の大將等は大概勇猛の人なるか又は然らざるかなり。もし勇氣ある人ならんか、君主は決して安全あること能はざるべし。何となれば彼自ら傭兵等を以て強大ならんとの野心あればなり。傭兵の主人たる汝を顛覆するか、又汝が保護せんと思へる民衆を壓制せんとするか。二者其一を以て其目的を達せんとすべきなり。反之傭兵の司令官にして怯懦ならん乎。是亦汝の滅落たるのみ。

人或は言はん。傭兵たると然らざるをとはす。如上のとはすべ

て同一の結果に出でんのみ。兵力を有する者は皆同一の野心を有するならん。余以爲らく。然らず。凡て軍隊は國君によりて使役せらるるか、又は共和政に由りて使役せらるるか也。而して國君ならば自ら大將たることを要し、共和政ならば其市民を大將として遣はすことを要す。其の遣はされたる大將にしてもし事を見る悪くば之を罷めしむべく、もし良くば任を續けしむべきも法を設けて其則を超えざらしむべきあり。而して國君及共和國が自己の軍隊を用ゐてのみよく大事をなし、傭兵は何等なきものにして、只害をなすのみなることは、經驗の吾人に教ゆる所なり。其の外軍事的共和國にして、自己の足によりて立ち、自己の武勇によりて維持し行く者は容易に篡奪せらるることなし。而してすべて外國の軍隊のみを用ひてこれに倚賴せる共和國の如くに市民の一人の手に政權の落つること少なし。ローマ及スパルタは己の軍勢の力によりて永く其自由を保つことを得たり。

スウイス人は隣國の民に比して一層軍事的あり。故に一層自由の民なり。僱兵の危険につきては古來其例に乏しからず。カルセージの如き是なり。所謂第一回のカルタゴ戦役の終りに於て、カルセージ人は己の僱兵の爲に滅ぼされんことをしたり。

エパミノンダス(Epaminondas)の死後、テーベ人はマセドン(Macedon)のフィリップを迎へて己等の大將となしぬ。フィリップは即彼等の敵を破り而かも彼等を己の奴隸となしぬ。又フィリップ公マセドニアのフィリップとは別人なり)の死するやミラン人はフランセスコ、スフォルザ(Francesco Sforza)を迎えてヴェニス人に對しぬ。フランセスコは敵をカラパッチオ(Caravaggio)に破り、却てミラン人に敵なる者と結びぬ。フランセスコの父スフォルザ(Sforza)は曾てネーブルスの女王デジョアン(John)に仕へたりしが、突然其軍隊を率ゐて女王の下を去りたれば、女王はアラゴン(Aragon)の王の保護の下に身を寄せざるべからざるに

至りぬ。

茲にヴェニス人及フロレンス人は是等僱兵によりて榮え、其將軍等は彼等市民を奴隸となすが如きことなかりしも、是れ實ら幸運に歸すべきのみ。何となれば僱兵の司令官等の或者は敗戦し、或他のものは反對を受け、又或他のものは其野心を他の方面に向けたるが爲に偶然然りしのみ。例へば、戦に於て勝利を得ざりしはデオヴァンニ、アキエート(Giovanni Acuto)なりき。故に彼を如何程迄信用してよろしきかを知ると能はず。彼にしてもし勝利を得たらんか、フロレンス人は皆彼の意のままにせられしならん。スフォルザはブラツキ(Braochi)を常に反對に有てり。是れ相互に妨礙たりしを以てなり。フランセスコは野心をロンバルディアに向け、ブラツキオは教會とネーブルス國の上に眼を注ぎしなり。

然れども更に近世のことを語らん乎。フロレンス人はポールツ

イナリを將となしぬ。この人や賢者にして、匹夫より身を起して大なる名聲をはせたる人あり。ポールもしピサを取りたらんかフロレンス人は如何にして彼と適合すべきかの術を知らざりしならん。もし彼にして其任を辭して敵の貨金に就かんか彼等は施すべきの道を知らざりしならん。又彼をして其任に在りて權力を保たしめ置きなば、遂に彼等の主となりしならん。ヴェニス人の發達の徑路を見よ、彼等が自己の軍隊によりし間は、安全にして名譽あるものなりしを知らん。是彼等が Terra Firma 即大陸に手をつけざりし以前のことに屬す。當時一切事件は皆該市の紳士及普通市民によりてなされたれば、彼等のなしたることは偉大なりしなり。然るに一旦大陸に向つて企劃するを始むるや、舊來の名聲と訓練とを捨て、伊太利の惡習に感染したり。而して彼等が始めて大陸に戰捷するに至るや、未だ大なる土地を有せず、其名聲は極めて大なりしが未だ其の將校等を恐るべきの要

に接せざりき。然るに後に至り、カーミグノラ (Carnigola) の司揮の下に國土擴張の業に従ふや、彼等は己の過失を發見したり。即ち彼はミラノ公を破り最も強大となり、其つ其任に於ては極めて冷淡にして怠慢になり行くを見たり。是に於て彼等は彼より大事業の豫期すべからざるを斷定したるが己得の土地を失はんとを恐れ彼を罷免せんと思せず。又實際に罷免し能はざりしなり。彼等は止むことを得ずして己等の安全の爲に將軍を死に致しぬ。

この後ヴェニス人の爲に將軍となりしものを擧ぐれば、曰く、バートロミオ・ダ・ベルガモ (Bartolomeo da Bergamo) 曰く、ロバート・ダ・サン・セズエリノ (Roberto da San Severino) 曰く、ピチグリアノ伯 (The Conte de Pipigliano) 及他の人にして是等の人の司揮の下に、ヴェニス人は得る所よりは寧ろ失ふと多かりき。例へば、其後間もなくヴェイラ (Verra) に於て起りしが如く、只一戰にして彼等が八百年間に亘り計るべからざる勞力と艱

難とを以て得たる所を失へり。もしその僱兵によりしことを考へなば、其勝利を得ることの緩慢微少にして、其敗戦の活潑巨大なる毫も怪しむに足らずとせん。

余の例證は引いて伊太利に入れり。この國は多年僱兵を以て萬事をさばきたる國なるを以て、論題を少しく高尚にして以て其起原發達を明かにし、是を如何に改善すべきかの法を講ずべし。

ローマ帝國が滅落に近づき、法王が俗世間の權力を握るに至りし時、伊太利は數個の邦國に分裂したることは人の知る所なるべし。諸所の大都市には貴族等に反對して兵を取れるもの多し。蓋し、貴族等は從來皇帝の恩寵を楯にして、人民を壓迫したりしが、これに對して教會も亦之を援助したり。乃ち世間に向て名聲と利益とを贏んことを欲してなり。他の都市には市民の中自ら立ちて君主となり、一切人民を其の下に服従したるものあり。即ち伊太利は帝國より務めて法王及

び共和國の手に歸してより、僧侶や市民やもと武にならば兵の用法と練習とを知らざるため賃金を拂つて外國人を招致するに至れるなり。

僱兵の軍隊に始めて名聲を與へたるものは、ロマグナのアルベリゴダ・コモ (Alberigo da Cono) なり。其他にはブラキオ (Braccio) 及びスフォルザ (Sforza) の如きあり。此二者は當時伊太利に於ける二大統率者にして、共にコモの訓練を受けたるものなり。彼等につぎて伊太利の軍を統率するもの以て今日に至れり。而して彼等の偉大なる所爲の結果如何と顧みよ。伊太利はチャールズに征服せられたり。ルイスに掠奪せられ、フランドに蹂躪せられ、スウイスの侮をうけたり。僱兵の將がなすとや先づ踏み臺となす所の部下の軍に名譽を贏て、次に之を己自身に奪ふにあり。蓋し彼等の領地たるや極めて狭小にして、己の勤勞によるに非ずんば、以て自ら支ふること能はず。又小數の部下

にて大事をなす能はず。さればとて大衆はよく之を養ひ得る所にあらず。是に於てか彼等は一計を案じ部下の兵を騎兵となし、隊伍に編して之を維持するには號令せしむることを以てその報酬となせり。この騎兵隊の風大に行はれたれば、二萬人の軍勢中歩兵は僅かに二千人を數ふるすら難きに至れり。加之。彼等は出来る限り困難問題の起るを防ぐことに努めたり。己等自身にも又部下の兵にも面倒なることの起ることを避けたり。故に戰場に於ては何人も殺すなきを以て法となし、只俘虜となし置き、後に至りて何等の毒害も償金もなくして悉くこれを放還したり。彼等は夜中城塞を襲ふことなく、又城塞より突出を試みることもなし。冬が到来すれば野に戰陣をはることなかりき。而かも將校等の怠慢より起りしにあらず。却つて其訓練を遵奉して然る耳。何となれば既に迷べし如く、彼等は兵卒の勞力と危険とを避けしめんと努めたればなり。而して其結果如何と顧みよ。伊

太利國は遂に奴隸の國となり、辱をうけ侮を招くに至れり。

第十三章 援兵を論ず

不利なる軍隊の第二は援兵なり。即ち或外國の君主が乞に應じ、手兵を率ゐて他の援助と防禦とに趣くものを云ふ。例へば近世行はれたる法王ジュリアスの乞に應じてスペイン王フェランド (Ferrand) が兵を率ゐて其援助に趣きしが如し。即ち法王がフェララ (Ferrara) の役に於て僱兵に痛き經驗をなめしたため、援兵の効によりて遂にフェララを降伏せしめたるなり。

是等の軍隊はそれ自身に於ては毫も不可なるものなし。只其崇りを被るは自ら之を招致したるものなり。彼等もし敗滅せんか、其傷害は援助を受けたるものこれを被り、彼等もし勝利を得んか、彼は援兵

の意のまゝにせらるゝを免れず。その例證につきては古來甚多けれども余は吾人の記憶に新なるかのジュリアスの實例につきて述べんとす。

ジュリアス十一世のフェララの役に於るや極めて急突に發し深慮を缺きたるの憾なきにあらず。即ち彼はすべてを一外來人の手に委じたり。然るにこゝに幸にも第三の事件偶發して彼がこの不幸に落ちるを援ひたり。即ち彼の援兵はラヴェンナに於て敗られたるが偶スウィヌ人が崛起して其勝利者を追撃せり。茲に於て彼は捕虜となるともなく援兵のために左右せらるゝことなかりき。援軍以外の軍によりて勝利を得たるを以てなり。

フロレンス人は軍備あきを以てピサを征服せんため一萬の佛兵を雇へり。彼等は外人にかゝる相談をもちかけたるが爲に以前己等自身の手一つに捌きしよりは、一層大なる危険に陥りたり。

コンスタンチノーブルの皇帝は、近隣を壓服してギリシアを保護せんが爲に一萬のトルコ兵をギリシアに送れり。然るに戰の終るやこの軍隊は歸り來らず。却つてギリシア衰頹の基をあすに至れり。

故に曰く、蓋し何等征服せんとの志を有せざる人は、援兵を求むるもまた妨げず。蓋し凡そ援兵なるものは傭兵よりも更に危険なるものにして、規律の整然たる、統一和合して、而かも他人の命令の下に動くものあれば、豈恐れて懼れざるべけんや。然るに傭兵なるものは勝利を得たりとても久しきを経ざれば以て汝に危害を及ぼすべきなし。何となれば彼等は汝の貨金を目當に諸國より集り來りしものなれば、一体に團結し居らず、而して汝が腹心の一部將をして之に號令せしむれば急に汝に危害を及ぼし得る程に至るものにあらず。要するに傭兵にありて憂ふべきは、其憶病懶惰なるにあり。援兵にして恐るべきは、勇敢活潑なるにあり。故に賢君は決して是等の軍隊の力を籍らんこ

を願はず。而して自己の手兵に倚頼するのみ。寧ろ自己の軍隊を以て敗るゝとも他の軍勢によつて以て勝たんことを願はざるなり。彼は即これら外人の兵によつて得たる勝利を以て眞の勝利と思惟することを得ざるが故なり。

余はこゝにシーザー、ボルヂアを例證として引き出すに躊躇せざるべし。公がロマグナを侵畧するにはすべて佛人よりなれる援兵を以てし、其助によりてイーモラ (Imola) 及フリー (Fiesole) を取れり。然るに後に至り其忠實を疑ふ所あり。己の安全ならざるを慮りて比較的危険の少き僱兵を用ゐんと決し、オルシニ、グイテリの二徒を雇へり。然れども是亦忠實ならず。危険なるを察して其約を解除し、己の部下のみに頼り復他を雇ふことなかりき。公がグイテリ等を用ゐたる時、己れの部下の外何等の兵も有せざりし時とに於ける、評判の異同を見ることを得べし。彼が自己の足によりて立たんとするや、彼の名聲をして

盛大ならしめたり。而して彼が自己の軍兵の絶對的君主となりし時程、彼の名聲の隆盛を加へしとはあらず。

余は伊太利國內より例證を求めたれば、今これを去ることを好まず。特に吾人の記憶に新なるが如き材料を供給する間は尙更らることなり。然れども茲にシラキユースのヒーエロを見逃すこと能はざるなり。その選ばれてシラキユースの將軍となるや、忽ち僱兵の頼むに足らざるを看破したり。即ち彼等の士官等は我伊太利國のそれと全じく腐れたる根性を有するを發見したりし也。彼れ思らく、此後續けてこの兵等を雇ひ置くべからず。さればとて解除せん乎。禍の身に及ぶものありと。乃ち彼等が個々に分裂するやうに處理して、其戦を行ふや自己の兵のみによりて、何等外國の助を籍る所なかりき。

余をしてこゝに舊譯聖書中より一の適例を引かじめよ。デーヴィッド (David) がフィリスチニス (Philistines) の勇將ゴリア (Goliath) と戦

はんとし、ゾールの許に行き軍に従ひて盡す所あらんとを乞ひし時、ゾールは彼を激勵せんが爲に己の武器を與へて裝はしめぬ。然れどもデーグ、ツドは之を身に着けんと試み、其身に適合せざるを以てよく兵陣の間に身を躍らすこと能はずとなし、之を辭せり。故に彼は只己の武器のみを以て敵陣に入らんとを乞へり。而して其携へしは只投石器と劍とのみ。之を要するに凡そ他人の武器なるものは、或は寬にすぎ、或は隘に過ぎ、苦にして身に固く、徐にして身にあまる等、適合せざるを常とするものなり。

佛王ルイ十一世の父チャールス七世は、幸運と勇氣とによりて英國の羈絆より其國を援ひ得てより、自己の所有にかゝる軍隊の必要を感じ、歩騎の兩種より成る民軍を設置したり。其後子ルイ王は歩兵を黜けて其かはりにスウイスの傭兵を入れたり。この過失は其後繼者によりてつゞけられ、今日もかほ之を見得べし。佛蘭西が今かほ陥るべ

きすべての危険の原因たり。彼等はスウイス人の名聲を高めて自國人の無能を誣り、之を辱しめ、全然歩兵隊を解除せり。而して騎兵をして他の兵―通常スウイスの歩兵―と共に大に交戦のことに従はしめて、遂に騎兵をして彼等の助けなくては戦ふの能力なきを信せしむるに至れり。かくて佛人はスウイス人に對して何事をもなす得ざるに至れり。又瑞西人なければ何事をも敢て爲し得ざりき。是に於て佛國の兵は傭兵と本國兵との混合隊となり、純粹の傭兵又は援兵より遙かに優れたるものとされり。然れども純粹に本國兵より成るものに比すれば、遙かに劣等なるものとなれることは多くの實例の證明する處なり。蓋しチャールスの設置したる所を利用し、改良しなば、佛國は打ち勝つべからざるものとなりしならん。然れども人の思慮淺き爲に、只表面を見、現在の味の美なるに心迷はされて、美味の裡に毒の匿れたるを知らざる也。このことは余が前に消化熱の例を擧げて説明し

たる如くにして、苟も國君たらん人にして不幸禍害の頭上に落ち來る前に之を豫知する能はざる如き人は、賢君を以て稱すべからざるあり。而して明敏よくこれを察知し得る人は、神の特別の恵をうけたる少數の人士のみ。もしローマ滅亡の第一原因を顧みれば、彼等がゴース人を招き入れて服従せしめたるに、あるを知らん。何となれば、是によつてローマの本國人を弱め氣力を減じ勇氣を沮喪し而して其の勇氣は却つてゴース人の胸中に注ぎ込みたりと見て可なるが故なり。是の故に余の結論に曰く。國君たる者は、適當にして自己の所有にかゝる特別の軍隊を有せざれば、其人決して安全なりと云ふこと能はざるなり。かゝる人は、逆運に際會して已を支ふべき自然固有の力を有せざる如く、全く運命の司配する儘に動かさるべし。されば自己の軍隊によらざる所のものは、強國の名聲を博するも、是より不安定不確實なるもの又あるべしとも思はれずとは、名君賢相の常に説く所なり。

自己固有の軍隊とは、其臣下、其市民等より成れるものなり。その他のものは、傭兵又は援兵に屬す。而して自國軍隊を整へ之を訓練する最上の方法如何は、余が先に述べし所を考量し、又歴山大王の父フナリア、其他多くの君主達、共和國などが、同様の場合に、なしたる方法を鑑みれば、容易に發見せらるべきのみ。

第十四章 軍隊との關係に於て國君のなすべき本務

是の故に國君は何等他の計畫も思考も研究も要することなく、只戰爭、軍隊及其訓練を必要とすべきのみ。是れ實に國君たるもの、本務にして因つて以て、單に父祖の力によりて傳來したる位を承継ぎ之

を保つのみならず。匹夫より起りて南面の君主たるべき、極めて重要なものなりとす。又他の一方には武を勵ますして、一層軟弱優柔なる方面に耽溺するが如き人は、すべてを失ひ國を亡ぼさるゝに至るものなり。何となれば國君にとりての第一要諦は實に此術にして權を得るも失ふも、之を勵むと怠るとによりて分るゝ耳。フランセスコ、スホルザは私人の資格にて戰に出で、其効によりてミラン公を贏ち得たり。而して其子はその煩累を避けんことを求めて、公の位より一平民におちたり。何となれば兵を知らずして公侯となるは獨り不幸と災害を生ずるのみならず。實に君主をして蔑み笑ふべきものとなす所のものなれば也。即ち國君があらゆる手段を盡して除かざるべからざる所の屈辱は實に此術を心得ざるとなり。其理由につきては後に述べし。權威を有するものと有せざるもの即武備あるものとなき者は殆んど比較にあらざるなり。何となれば、武備あるものが武

備なきものに從ひ其命に服し又氣力も注意力も鈍く一般に力弱きものが活潑にして武的なるものを以て部下とし而して安全たり得べしとなすが如きは殆んど想像し得べからざる所なればなり。一方は輕無の心を有し、一方は狐疑の心を有するが故に前述の如く武と非武との二者對立する時は萬事好都合に行くべきの理なきなり。是の故に軍隊の規律を心得ざる所の君主は幾多の禍患に罹ると同時に又、己の軍隊より愛せらるゝことなく、信せらるゝことなかるべきなり。是の故に彼は治に於て亂を忘るべからず。千軍萬馬の間にあるの思を緩うすべからず。否、平時に於ては戰時よりも更に深く研究的に戰のことに思を致すべきなり。活動により、將た又研究によりて以て其目的を達すべきなり。

活動につきて言はんか。即ち是れ身體の適用にして彼の軍隊を嚴肅なる規律と習練との下に保つべきは勿論其外に狩獵即ち習俗に從

つて云へば卷狩鷹狩等に出で、身體を練り練ひ飢渴困勞になれしめ
 それと共に地理に通瞭せざるべからず。即海岸及國の情勢は如何山
 の高低大小谷原の廣狹平野の面積は如何河川水澤の性質は如何等
 つきて學ぶ所なかるべからず。而も是多大の好奇心を以て迎えらる
 べきことなり。是等の智識の有用なる方面二途あり。其一は即ち彼
 がこれによりて己が國の情勢如何を知りて防禦の爲に更によく備へ
 得ることなり。其二は即ちこれを學ぶ習練によりて彼が必要上知ら
 ざるべからざる他國の情況を研究する能力を得ること是れなり。蓋
 し山や谷や平野や川や沼や是等は他の州のそれらと類似同様のすが
 たを有するものなり。例へばタスカニ (Tuscany) に於けるが如し。故
 に一州を知れば他の州を知り得ること容易なり。而して國君たる人
 がこの點に於て缺如たるは、大將たるの資格に於て缺くる所あるもの
 と云ふべし。國の情形を知るはこれ敵を叩き出して其所在を知るな

り。陣營を張るの地點を知るなり。都合よく都市を圍む法を知るな
 り。

アケイア (Achaia) の君主フィロポメニス (Philopomenus) の性格につき
 て歴史の語るもの、中最も推稱に値するものなり。即ち平時に於て
 彼が只軍事の外何事をも考へざりしこと是れなり。彼が友と携へて
 田舎に出づるや突然立ち止まり友を顧みて次の如き議論をなすこと
 數々なりしと云へり。

『敵もし彼方の丘に據り、我軍もしこゝに位置せば地の利は何れの
 軍が占めたりや』

『最も安全に彼等を攻撃するの法如何』

『我軍もし退却すべしとせば其最上の手段如何』

『敵もし退却せば之を追撃するの法如何』

故に彼は旅行の際軍事に關係あるべき主題をもち出しては伴侶の

もの、意見を叩き、自己の意見を開陳し議論を闘はして以て之を精練したり。絶えて怠るとなく、其永き間の練習と其意を用ゐることの深甚なるものありしとにより彼の堪能は極めて完全の域に至り、如何なる變事如何なる困難の軍隊に起り來ることありとも之を方寸のうち

に收め得ざるものなかりき。
 心意の習練につきて國君のなすべきことは史を讀むに精しく最も優れたる英雄豪傑の事蹟を考察するに熟するにあり。古の偉人傑士が如何にして戰陣の間に身を處したるかを觀察せよ而して其勝利の基、所以を思ひ其失敗の由つて來る所以を察し、一は之を避け、一は己も亦之に學ばんことを努むべきなり。殊にその讀む所の史乘に於て古の英雄に會せんか。これぞ我が未見の友として其行爲の摸範に鑑むべきなり。已が行爲を之に倣はしむべきのみならず。造次顛沛も彼の行爲を己の念頭より去らしむべからざるなり。古の人これをか

せるあり。歴山大王のアキレス (Achilles) に於ける、シーザーの歴山大王に於ける、スキピオのキロス大王に於ける、以て見るべきなり。クセノフォン (Xenophon) の書たるキロス (Cyrus) の傳を讀む者は、誰も皆スキピオ (Scipio) が如何許りキロスの摸倣によりて己の名聲を博するを得たるか、又其謙讓、温厚、仁慈及び寛厚の徳に於てキロスの性格に一致したるかを知らん。故に賢君はすべて是等の法則を奉ずる者也。而して平時に於ても決して怠ることなく、精勵以て身を持し、この法則に従つて心を注ぎ、逆運來るも之を恐れず、却つて平世學ぶ所を試し、其効果を收めんことを期するものなり。

第十五章 國君の名聲又は誹難は何に由つて來るか

茲に余は國君が其臣下其友に對して如何に身を處すべきかを見ざるべからず。此點に關しては已に多くの著者によりて論せられたるが故に余が復之を筆にするとは恐らくは超權の謗を受けん。殊に多くの論者と説を異にするに於てをや。然れども余は茲によくこの事を了解せんとする人の利益を慮つてなさんとするものなるが故に、事物皮相の想像よりも真相の本然に注意せざるべからず。世人は實際ありもせず、又見しこともなき邦國共和政などを勝手に夢想するもの多し。實際の生活は理想と相距ると遠く理想のみを夢みて現在の實際如何を忘るゝ時は忽ち身の破滅を招くべし。柔和なる人物や何事に

まれ正直ならんと欲する人は猛惡なるものや惡人の前にては大なる危険に逢ふことを免れざるべし。茲に於てか自己を維持し行かんと欲する所の君主は已れの行動をして必要に應じて或る時は善ならずし或時は不善ならしめんかを辨ふべし。今日の世界になき所の言はば空想的想像的の國君に付いては今語らず。又苟も眞實ならざるとは之を論ずるをやめて、余は左の如く云はんぞ。凡そ高き位置顯要の位置にある人物、就中君主などにて、人の話頭に昇るは何等かの著しき性質を有するものなり。而して其性質によりて或は稱せられ或は難せらる。故に或者は寛大にしてよく金を散すと稱せられ、又或ものは吝なりと稱せらる。或者は與ふに急に於て或者は取るに力を餘さざる也。残忍なるあり。仁慈なるあり。信義を缺くあり。義理固きあり。氣弱く婦女子に類するものあり。勇猛にして野心を包藏するものあり。一は叮嚀にして他は倨傲なり。一は貞節を守り他は淫逸を逞うす。

一は誠實にして他は狡猾なり。或は頑迷圓陋なるあり。或は平易近
 づきやすきあり。嚴肅なる者あり。輕卒なる者あり。或ものは敬虔
 の念にとみ、或ものは無神論者なり。
 それ斯の如し。國君たる者は右に上げたる善き性質のすべてを備
 ふることよけれ。これ賞嘆すべく大に望しき事たるは何人も拒むべ
 からざるなり。然れども悉くこれを備ふると六かし。悲むべし吾人
 の性質は變り易く人心は計りがたくして又邪僻のものなり。故に其
 國を失ふ如き不徳の誹謗を如何にしてか免るること都合よけれ。ま
 たその報いがかほごまでに甚しからざる他の惡徳をば充分に用心し
 て到底避くべからざる所には其迷惑の成るべく少かるべきやう注意
 すべきなり。
 然れども又これをせざれば其國を維持すること能はずと云ふ如き
 の惡行ならば其惡行に對する誹謗の爲に毫も心を勞するを須ひざる

なり。蓋し一方面のみよりして事物を觀察せんか、一見善良有徳なる
 かの觀を呈する者あるべく、而も更に深察せん乎。缺陷の發見せら
 るゝものあり、之れに反し外見上の惡事と雖國君にして之を爲さん
 乎。平和と安全とを齎すものあるあり。

第十六章 寬仁大度及び吝嗇につきて

前章諸種性質の第一に擧げたるものより始めんに寬裕即金錢を惜
 むの心なしと稱せらるゝは、利便を得ることなるべし。然れども之に
 よりて汝は恐るべきものなりとの觀念を懐かしむることなくして徒
 らに金錢を散し與ふるは、只汝の損害となるべきのみ。蓋し有徳にし
 て然るべき方法にて金錢を散じて惜まざるも、人これを知るものなき
 時は吝嗇錢を愛すとの反對の誹謗に陥らざると稀なり。故に金錢を

惜ます大度なりとの評判を持続せんには如何なる種類の費澤と雖も之を避くべからざるなり。かくてこの性質を有する國君は、この種の費用にすべての歳入を用ゐつくし悲しむべき運命に陥らん。而して人民より徴收して何等假藉することなく、苟も金銭を得んが爲めには其方法を選ばず之を行はざるなからざるに至らん。斯くの如くにして國君一たび貧に陥らんか人民の怨府となり、萬人の嘲罵を招くに至るべし。かくて金銭上の大度の爲に小數のものを満足せしめんとして多數の怒を買ひ運星の悪しきとの第一歩を感ずるに至りては既に滅亡の大危険を冒かす者と云ふべし。後に至りて其の非を知りこれが救済の策を講ずる時は大度と反對なる極端に落ち所謂吝嗇の甚しきものとなるなり。

それ然り故に國君にして世に知られたるときにも己に何等の損害を被ることなく金銭上の大度たる實を行ふ能はずとせば貪慾なりと

の惡評を恐るべからざるなり。此れ實に賢君の行也。何となれば彼にも亦た金銭に於いて淡泊大度なりとの聲望を負ふべき時機の來ることあるべきを以てなり。時期とは何時ぞや。彼が吝嗇なるがため歳入を増加して敵の侵入あるをも之を防ぐに足り、又人民を戦時税の重きに苦しむることなくして他國に侵入することを得べき時即ち是れあり。かくの如くにして彼は何等徵集することなき遠近幾百萬の人々より有徳寛大の君主なりと稱せられ、彼が與ふることなき近侍小數のものより吝嗇として評せらるゝに過ぎざるのみ。吾人は現今に於て吝嗇と稱せらるゝ人によりての外他の種の人に、よつて何等偉業のなされたるを、きかず。他の人は皆失敗に終れるなり。法王ジュリアス十一世は法王の椅子を得んが爲に自由に金銭を散し之を惜まず利用したり。然れども佛蘭西國王と戦つて已を支へんが爲め、以後決して此の如きとをなさざりき。又勉めて儉約を行ひ

何等賦課することなくしてよく數度の戦争を行へり。彼が久しきに
亘りて吝嗇を行ひしは即ち非常莫大の費用を得たる原因たりし也。
スペインの現帝にしてもし金錢上淡泊大度なりと思はるゝを欲し
たらん乎。かくも屢々大なる計畫を企つることもまた度々偉大な
る勝利を得ることも到底叫ばざりしならん。故に國君は吝嗇なりと
の評を得たりともこれにつきて其心を勞することあるべからざるな
り。蓋し彼はこれによりて民に誅求せず、又己を擁護するに足り、貧に
陥らず、賤められず、又民を掠奪せず、以て其領土を強固にすることを
べきなり。

人あり説をなして曰く、シーザーは彼が金錢を惜まざりし大度によ
りて帝位にのぼることを得たり。其他多くの人と同様の態度により
て己を偉大ならしめたり。如何と。余は答へて曰はん、汝は眞に國君
たるか、又は國君たるべき道にあるならん。其第一の場合ならば金錢
を散じて以て大度あるを示すは只害あるのみ。第二の場合には是れ
實に必要のことたり。而してシーザーはこの種に屬し、よつてローマ
帝國を得たりしなり。然れども彼が帝位を得たるの後、毒刃に斃るゝ
ことなく、金錢上の大度を永く續けたらば、彼は實にローマ帝國を亡ぼ
したりしならん。茲に又説をなす者あり。曰く、己に國君たりし人
にして、又其軍隊も偉業をなし、遂げたる人にして、而かも金錢を惜まざり
しとの名を得たる者多しと。余は答へて曰はん、余は答へて曰はん、其國君の費し
たる所は己自身の金なるか、人民の金なるか、又は他國人の金なるかの
三つの場合あり。第一の場合には、彼宜しく節儉なるべきなり。第二
の場合には、彼が思ふ儘に贅澤三昧にして可なり。決して金錢を惜む
ことなかれ。盛んに之を散すべき也。然れども掠奪と誅求とに専ら
にして支へ居る所の國君は止むを得ずして、金錢上に大度を示すもの
なり。然らざれば、其軍隊は逃亡すべし。而して第三の場合の如く己

自身の所有にもあらず、又己が人民の所有にもあざざるものを以てしては、毫も惜むなく浪費に委すること尤千萬ならずや。シーザーのなせし所かくの如し。キロス王のなせし所斯の如し。歴山大王のなせし所また相全じ。蓋し他人の所有を費すは、自己の名聲をおとすよりは、實ろ之を高むる所以なればなり。己自身のものに費すほど害を及ぼし致命的のものあらず。又金銭上大度なるほど破滅の基なるものは他にあることなし。何となれば、之を爲すことによりて之を用ゐるの能力を失ひ貧弱にして嘲笑すべきものとなるべく貧窮を免れんとすれば、汝は貪殘的となり人に悪まるべし。而して國君たるべき人にとりて嘲笑せられ惡み忌まるゝが如きは最も避くべきとなり。而かも金銭上の大度は實に此れ等の状態に立ち入らしむるものなり。これをよく／＼考ふる時は、寧ろ錢惜との惡評を被ることも、金銭をおしますとの評判を得んとして暴君に陥らざるを得ざる如きとなき様

にする方一層智謀に富める業なるを知るべし。蓋し前者は憎惡と云はんよりは寧ろ名譽毀損の誹謗なれども暴君に至りては憎惡と汚名とを併せ被むる所のものなればなり。

第十七章 殘酷と溫和に就て併せて君主は

恐れらるゝと愛せらるゝと執れ
を選ぶべきかに就て

余は移りて次の性質に就いて之を論せんと欲す。凡そ國君は殘酷ならんよりは仁慈なるべきものなり。而も其仁慈や決して濫用せられざるやう細心の注意を要す。シーザー、ボルヂアは殘忍を以て稱せ

らる。而も其殘忍や以てロマグナを服し之を併せ之を平和に鎮め之を忠實ならしめたり。若し之を以て利益なる行ひとなさば彼れフロレンス人が殘忍と思はるゝを免れんとしてピストイア(Pistoia)をして破壊せしめたるに比すれば更に仁慈なるの觀なきにあらず。故に國君は縦ひ殘忍の手段に由るも其臣下をして忠實に義務を盡し合へしむることを得ば殘酷の罪を以て評すべからざるなり。一般に仁慈を行ふが爲めに寛に狎れて國內の亂を惹起し引いて掠奪と虐殺との必要を見るよりも始めに少數を罰して以て一層の仁慈を行ひ得るに如かざる也。其由つて來る所如何といふに法外なる仁慈は一般の民に對して惡しき結果を生ずれども或特定のものを刑罰するはそれ以外の人には何等影響を及ぼさざるを以てなり。然れども新に國君となりたるものはこれに伸ふ危險の多大なるものあるがために殘酷の罪名を免るゝこと難しとなす。如是きは至難

の業にあらずや。故にローマの詩人ヴァーギルは其事ふる女帝デドトに代り。其政府の新きがために苛酷なるを辨じ歌うて曰く、

Res dura, et regni novitas, me talia cogunt moliri, et late fines Custode tueri.

『新しき國を治めんすくなれば』

われには許せ幸うすき身に』

然れども彼は凡ての事に對して直ちに信用を置くべからず。其行動に於てあまりに急ぐべからず。又己れに對し恐怖羨怨の心を生ぜしむべからず。而して智慮と仁道とを以て己が政を調和し信頼に過ぎて不注意に陥り不信任に過ぎて堪ふべからざるに至るべからず。茲に於てか先づ來る問題は恐れらるゝと愛せらるゝと孰れを選むべきかといふこと是れなり。答へて曰く二者を得るに若かざるなり。然れども此れ容易に達し易からざるが故にもし其一を要求すべしとならば愛せられんよりは恐れらるゝの一層安全なるに如かざる也。

盡し人の性たる恩を知らず、心變り易く、偽善的にして危険を恐れ、利得に盲目なる者なり。彼等にして汝の恩惠利益を受け而して危険が遠方に退けられたる間は彼等は全然汝のものなり。彼等の血族彼等の土地彼等の生命と彼等の子女等すべて汝の役に服するものなり。然れども一朝困難のごと起り危険身に近づき彼等の助を要する時至れば彼等は叛謀するに躊躇せざるなり。故に彼等の言に信頼しすぎ身に一兵をも有せざる時は汝の滅亡は疑なかるべし。蓋し金錢によりて支へられたる和親は精神の偉大寛大等によりて支へられたるものに非ざるが故に平常は何氣なく見ゆるも、一旦緩急ある場合彼等は散し盡さんのみ。加之人は其恐れられんことを望める人に對してよりも愛せられんごの野心を懐ける人に對しては、其怒に觸れても悔ゆると少きものなり。其理由は愛情たるや僅かに義理の紐に結ばれたるものなるが故に人性の悪なる己の利益になる折もあらば之を破るに

躊躇することなければあり。然れども恐怖は刑罰を承知して成立せるものなるが故に、之を散ずること容易ならず。

然れども國君が民に恐怖心を懐かしむるの法は其愛を得ざるにもせよ、其惡みを受けざる如き方法に於てなすべきなり。何となれば恐れらるゝと惡まれざるは全く兩立し得ることにして、國君にしてもし、彼等の土地に對して何等の暴行を加ふることなく、彼等の妻女に對しても貞節名譽を損ることなく、又一人の生命を奪ふべき必要ある時、雖も理由明かに世人に知れ渡るまで時機を俟ちて生命を奪ふにつき、正當の辨明立つべき事項を充分に手に控えて後斷行せば、彼等は常に恐れ且惡まざる状態にあるべし。殊に汝は、彼等の土地を侵さざるやう注意すべし。彼等は父祖の殺されたるは寧ろ忘るゝとも世襲の財産の侵さるゝことは決して忘れざるなり。然り而して他人の財産を沒收するに就ては種々の口實を發見するものなり。而して一旦掠

奪せんとする時は更に他のものを掠奪せんとして其の理由を作ることを得べし。之に反し他人の生命を奪はんための口實は稀にして之あるも忽ち消滅するものなり。然れども國君もし其軍隊の頭に立ちて一團の衆に號令するの地位にあらん乎。必要に應じて殘忍なるべきこともあり。何となればこれなくば如何なる軍隊も統一し行くこと能はず。又大事の折にその用に立つべしとも思はれざればなり。ハンニバルの偉業は多大なるものあるが其中に就て一例を擧ぐれば彼れが諸種の異なる國民より成れる大軍を擁し海山をこえて遠く之を敵國に導き其戰に利ありし時期に於ても又逆運に襲はれし時期に於ても曾て軍隊の間に煽動騒亂のありしことなく、又其上官に向て謀反を企てしものあるを聞かざること是れなり。其由つて來る所以を尋ぬるに即ち是れハンニバルの不人理なる苛酷より出でしものあり。不人理なる苛酷は彼が有する種々の徳性をして其結果を擧げし

めたる者なり。彼をして部下の兵士の恐怖する所とならしめしも亦實に是れならずんばあらず。而して彼にして種々の徳の光なく單に苛酷そのもののみなりしならんには何等の意義をも有せざりしなり。或著者は彼の大功績を賞嘆しながら又其原因を非難せり。是れ思はざるの甚しき者と云ふべし。彼が實際如何の人物なりしか。スキピオの實例之を証明して餘あり。スキピオは如何なる人ぞや。彼が在りし當時のみならず。凡ての歴史を通じて名譽ある人物なり。而かも彼の軍隊はスペインに於て叛謀せり。其眞因は彼が温和にすぎ寛裕に流れしが爲なり。此の如きは嚴肅なるべき軍隊的規律に適合せず。又兩立すべきものにあらざるなり。又ファビアス、マキシミナは (Fabius Maxima) ローマの元老院に於て彼を叱責して汝はローマ軍隊の破壊者なりと曰へり。ロクリス (Locris) の民スキピオの一部將の爲に掠奪せられ破壊せられたることありしが彼等は正しく償はるゝこと

なく其暴行者は罰せらるゝこともなし。是れ正しくスキピオのあまりに寛大なるに起因せり。元老院の一人は彼の爲に辨護して曰はく、他人の悪行を罰せんよりは、己自らこれを爲さざらんことを更によく心得たる人多し。スキピオが寛大の性たる、もし彼にして永く軍司令官たるの位置にあらしめば彼の名聲をおこすべき時の至りしや必せり。然れども命を受けて直接元老院の下に屬するに至りしかば彼の缺點たる寛大の性は人々の知る所となり、却つて彼の名聲を辱する所以となれり。

余は茲に元にかへりて愛せらるゝこと及び恐れらるゝことについての結論に達すべし。曰はく人が愛するは其人自身の自由意志による。然れども恐れを懐くは君主の自由意志に存す。一は自動的にして他は他動的なり。故に賢君は人の自由意志によりて決する愛情に其基礎を置くことなく、己の意志による恐怖の上に基礎を置くべきなり。

り。而かも己に述べし如く己をして嫌惡の標的たらしむべからざるなり。

第十八章 國君は如何なる程度まで己の言

を守るべきか

國君が其言を食むことなく眞實正直なる生活をなし毫も譎詐權謀の行なからんことは如何に稱すべきことなるか吾人の喋々を要せざるなり。然れども當今の世界に於て忠實正義の爲に拘束せられざる君主たちが大なる仕事をなしとげ其狡猾にして巧妙なる手段によりて相手を陥れ之を出し貫き正直確實の徒を壓迫し苦しめつゝあるは實際經驗上事實の證明する所なり。歩を進めて之を説明せんには汝

は、凡そ争ふに二途あることを知らざるべからず。一は合法の手段なり。二は強力の手段なり。一は人に適し、二は獸に適す。然れ共世上往々第一の手段を以て足れりさせざる時、第二の手段に倚賴せざるべからず。故に何時合法の手段を用うべきか、何時獸の道によるべきかを了解するは國君に取りて最も必要なるとなり。この事たる古來國君たるべき人に教へられたることにして例へばアキレス (Achilles) や其外多くの君主達が其教育をセントア人 (The Centaur) なる彼のチロン (Chiron) に委せられたるは之を證明して餘りあり。

註 Centaurs は Thessaly の Pelion と Ossa との中間にすめる蠻族にして半人半馬とせらる。彼等は精神界動物界の關係を體得せり。而して獸性は人性を駕禦せり。只然らざる者をチロン一人となす。チロン乃ち彼等を己が訓練の下に置き半獸半人の教師を選びて之に學ばしめたり。これ他なし。國君たる者は獸性人性の二を備ふる

ことを要し其一を缺けば永續することを得ざるを以てあり。それ然り國君は野獸の性質を帶ぶること必要なるを以て彼はすべ。の獸類中にも獅子と狐とを學ばざるべからず。獅子は係蹄陷穿を知りて之を避くる能はず。狐は狼に逢ふて自ら守ること能はず。故に國君たるものは係蹄陷穿を見出す點に於ては狐たるべく狼を威嚇せんには獅子たらざるべからず。獅子のみを以て理想とする者は這般の妙味を理解すること能はざるあり。故に國君にして賢明智慮の人たらん乎。口約を守るがため身に害の及ぶ時は之を守る能はざるなり。又守るべからざるあり。其約束をなしたる原因の去りたる後亦全じ。萬人皆善人のみならばかゝる教をなすべからず。然れども世人は奸惡にして國君との約を確守するものにあらざるが故に國君も亦嚴格に約を踏むべきの義務なきなり。又己の破約を正當なりと強辨すべき正當なる論據の存せざるとしては殆ど之れなきなり。

余は近世の實例をあげて如何に多くの和親契約等が國君の不信によりて破られ而して狐を體現したるものが最も良く成功したるものなるかを證明するを得、然れども這般の消息をむき出しに行ふとなく、偽善を巧妙に行ふとは極めて重大なる問題なり。而して人民の性は極めて單純にして目下の必要には忽ち服従するものあるを以て詭計を懐ける人の面前には忽ち欺慢せらるゝものあり。余はこゝに余が記憶に新なる一例を挙げざることあたはず。

アレキサンダー六世は誦詐より以外のことは何事をもなしたることなく又考へたることなし。而して其奸計を行ふべき事件の缺乏を告げたることなし。何人も彼の如く確かに保證することなく約束することなく、又彼の如く誓を立つることもし。然れども亦彼の如く之を實行せざる者もなし。然れども彼はよく世間を了解したれば曾て失敗したることなし。故に國君は上述の如き善良なる諸性質を身

に備へ置くの義務あるにあらず。只備へたるが如くに見せ掛くべきのみ。否余は敢て云はんと欲す。此る善良なる徳性を實際に身に備へてすべの折に之を實行せば甚だしく損失を招くべきのみ。外見上だけに之を有すること、それによりて、大に利益をかり得べし。善良らしく見え仁慈らしく見え、可憐に見え、信實らしく見ゆるは最も望ましきことなり。但だ機に臨みて全く之と反對の行爲をなし得るやうに汝の心意を豫て整へ置かざるべからず。

國君、殊に新に其位を得たる國君はすべての人が有徳なりとなすものを悉く行ふこと能はざるものなり。彼は其位を保つ爲に人道に反すること無慈悲の行爲、宗教的ならざることを行ふべき機會多し。故に彼の心意は己が思ふまゝに運命の如何風向の如何に應じて自由自在に曲げ得るこそ便利なれ。己の身に出來得る時は善良たるに躊躇するなかれ、然れども必要の場合には好惡をかし得る心得なかるべか

一三四

らず。凡そ國君たるものは特に注意して、己の口より出づる詞は前に述べたる五つの徳性を備へたるものたるべく、それ以外如何なる語をも洩すべからず。彼は同情眞實人道純潔信仰の觀を呈せざるべからず。特に最後の信仰らしく宗教的に見えしむると最必要なり。人は外見にて判断するものなり。手にて觸れ感情的に定むる者にあらざる也。萬人之を見るも之を了解する者は少數のみ。万人は如何なる外見をなすかを觀るのみ。實相如何を知る者は少し。而してこの少數のものは外見の偉大を觀察して國君に味方する多數のもの、意見に反對せんとするものに非ざるなり。而して凡ての人殊に國君の行爲に於て何人も之を批判するの權を有せざる時は、目的を達しきへすれば其れにて満足すべきものなり。

それかくの如し、國君をして其の生命を保たんがために彼がなし得る所をなさしめよ。而して彼をして其國家を維持せしめよ。彼の用

ひる手段の如きは如何なる者にも名譽ある者と思はれ、万人之を稱賛すべし。何とあれば人々は常に外觀及び結果によりて欺かるゝものなればなり。世界は此の如き凡人を以て充滿せらる。少數の賢明なるものは多數なる愚者が何等偏執し主張する所なき時のみ始めて其勢力を表はし來る。當今の世にありて或る國君の存するあり。然れども余は彼の名を秘せん。彼の口には忠信平和は説教せらる。然れども一つにても之を實行するとなく。若し之を實行せんか。彼の權力と名聲とは忽ちにして奪はるべきのみ。

第十九章 國君は輕侮嫌惡を受けざるやう

警戒せざるべからず

以上に於て吾人は國君の資質として最も大切なるもののみを論じ來りたれば本章に於ては他の資質につきて簡單に述ぶべし。憎惡輕侮を招かざる様之を避くべきを以て國君の務となすべきことは已に之をのべたり。彼がこれを務むるだけ已の役をよく盡したる者と云ふべく他の惡徳ありとも何等の危險不便に遭遇することなかるべし。余がさきに述べし如く、臣下の土地を奪ひ其妻女を猥る程、民の怨憎を受くべきもの他にあるべからず。故に彼は務めて之を避けざるべからず。世間の一般が平穩に已の土地に安んじて已の名譽を傷けらるゝとなき間は彼等は極めて平和なるものなり。故に國君の争ふ

べきは只少數者の野望と功名心とに對してなり。これらは種々の方法にて威壓し得ること易々たるものあり。然れども國君にして婦女子の如し、輕し終始一貫するなし、小膽なり、不決斷なりとの評を受けん乎。彼は輕侮の標的たるべし、決斷心につきては彼は海中の巨岩の如くなるべし。彼の行爲に於て、豁達勇氣、嚴肅剛毅等の状態の見ゆるやうに努むべきなり。且つ彼が臣下の私事に就いて下したる宣告決斷は金輪際動かす。又彼の意見は如何なるふありとも、何人も之を動かすと能はざるものたるべし。國君にしてかくの如くならば彼の位置たる極めて堅固なりと謂ふべし。國君にして臣下の畏服する所たれば則ち容易に陰謀に陥らず。又侵入を受くることもなし。蓋し彼は非凡の人物に見え其臣下にとりて怖るべき者なるが故あり。蓋し國君の畏怖すべき者たる方面二あり。國內にありては臣下に對し、國外にありては已と同等の者に對して也。是の後の者に對しては、堅甲

利兵盟約の固きを以て已を擁護すべきなり。國君の力にして偉大ならん乎。善良なる盟友に事缺くことなかるべし、國內陰謀に由りて紊亂せられざる限り國內は平和なるべく國外より如何なる動亂の來ることありとも、國內にして靜平ならんか、何の恐るゝ所かあらんや。平然たることかのスバルタのナビスの例にならうべきのみ。

又これに反し縦ひ外國より影響せられざるにせよ、國內にて秘密に陰謀するものなしとも限らず。然れども國君にして臣下の惡み蔑すみを受けず。民をして不満を懷かしめざれば國君は自己をして安全ならしむべし。多數の惡み蔑すみを受けざるやうにすることは是れ陰謀を豫防する上策の一なり。叛謀を企つるものは國君を殺して以て人民を満足せしめんとす。其れが却て人民の激怒を買はんことを思へば心自らたぢろかざるを得ず。陰謀には困難危険のひそめるあるを以て容易のことにて之を企つるものあらざるなり。經驗の示す

所によれば陰謀をなすものは多けれども、而かも成功するものは稀なり。是何ぞや。何人と雖己一個のみにては陰謀は出來ず。不満の徒を語らばでは盟を結ぶこと能はざるを以てなり。又不平の徒に叛謀の端緒を打ち明け見よ。彼に不平を醫するの機會を與ふる者なり。蓋し不平の徒たるや己に何等の畫策あるとなく、只暴露して以て己を利する所あらんとするを以てなり。即ち彼等は一方に於ては其利を得ると確實なるを見、而して他の一方に於ては頗る冒險不確定なるを見る。故に彼不平の徒なるものは、汝を裏切することなくんば汝に對して恐るべきの敵ならざるを得ず。

要するに陰謀なるものはこれを企つる者の方に於て畏怖、怨望、處罰の恐の外何者もあることなし。國君の側に於ては政府、法律の威權、盟友及國家の援助あり。是れ等は國君を擁護する所以にして、これに臣下の愛情の加はるあらば何人と雖も猥りに陰謀を企て得るものにあ

らざるなり。此場合に於て陰謀者は陰謀の遂行前に恐るべき理由の存するものある如くこれを遂行したる後に於ても亦恐るべきもの存するあり。何んとなれば人民を敵とし身を遁るゝに所なきに至るべければなり。これにつきては多くの實例を示すことを得れども余は吾人の祖先の時代に起りたる一例について述ぶべし。

ハニバル・ベンチヴォグリ (Hannibal Bentivoglio) は現代ハニバルの祖父にして、ボロニア (Bologna) の君なりしがカンネスチ黨 (The Caneschi) の陰謀によりて殺されたり。其族勦滅せられ後に残されたるは當時なほ搖籃の中にありしデオーン (John) 一人のみ。然れどもこの叛逆の終るや人民蜂起してカンネスチ黨を滅ぼしたり。これ畢竟ベンチヴォグリ家が人民の間に愛をうけ居りしに由る也。人民の愛情は極めて強かりしかば、ベンチヴォグリ家の人にして位に昇り得べき人を求め諸方に尋ねれども容易に得ず。遂にフロレンスに於てベンチヴォグリの

庶子の鍛治屋の子と稱せられて存するものあるをき、彼等は使節を發して之を迎へしむ。鍛治の子と呼ばれし庶子は迎えられて、ホロニアの市に入り、政權をとりて彼のデオーンが成人するに至るまで、極めて善政を行へり。

故に余は斷言して云はんとす。國君にして人民を己の味方とする以上陰謀の如き深く意とするに足らざるなり。然れども一旦彼等が不満を發し、國君に對して僻見を懷くに至らん乎。國君は何事と雖何人と雖恐れざるを得ざるなり。是の故に賢君は貴族をして失望せしめず。人民をして不満を懷かしめざるやうに絶えず注意せざるべからず。此の如きは實に國君にとりても此上なく重要なとなればなり。近世の尤も秩序正しき國の中に於て佛蘭西は其隨一に居る。多くの善良なる法律のあるありて、國王の自由と維持とを助くるやうの仕組にふれり。例へば議會及び附與されたる權威の如し。是れ佛國王政

の創建者が聰明の君なりしを以て貴族の野心と傲慢とを洞察し。之を羈束し、之を抑制せんと欲すると同時に他の一方に於ては人民の貴族に對する憎惡の甚きを知り。而かも此憎惡は恐怖より發するを知り、之れに應ずるの策を建てたればなり。乃ち國君もし平民に與みせば貴族怨み貴族に與みせば平民に怨まる。是に於て第三の判斷者を設け、之をして何等國王に影響を及ぼすことなくして、貴族を抑制して平民を保するの法をとりぬ。君主及び國家にとりて之より安固なる仕組は考へ能はざるなり。是よりして吾人は又一の教訓を得べし。國君たる者は不正怨嗟を起す如きとは他人をして之を行はしめ恩惠は己自身に之を施すにありといふと是れなり。之を要するに國君は貴族を尙ばざるべからず。只是れによりて人民の憎みを受けざるやうにすべきのみ。

ここにローマの皇帝の歴史を考ふるに、其の中には余の意見と反對

の事を證明するに足る實例も多かるべし。それと同時に其行爲顯著にして誰の目にも寛宏大度なりし皇帝が、其位より落され。又は反逆の徒の毒刃にかゝりて斃れしものも亦少からず。これに對し正確の回答をなさんが爲にはかゝる皇帝の性質及び其事の起りし原因を探らざるべからず。然る時は余がさきにのべし所のあやまらざるを知らん。而して余は當時の歴史を讀む人にとりて著しき事項を述べんと欲す。而してマークス帝よりマキシミナスに至るまでの帝をつぎくゝに擧ぐべし。即ちマークス (Marcus) コムモダス (Commodus) パーチナクス (Pertinax) デリアン (Pulian) セヴェラス (Sverus) アントニナス (Antoninus) カラカラ (Caracalla) マクリナス (Macrinus) ヘルオガバラス (Helio Galus) アレキサンダー (Alexander) 及びマキシミナス (Maximinus) 是なり。第一に考へざるべからざるは他の國に於いては、貴族の野心と人民の傲慢とより外他に國君の邪魔となる者なきに、ローマにては兵士等

の貪慾と殘忍とが第三の邪魔物として數へられたり。而してこの災厄の爲に、ローマ皇帝にして破滅を招きたるもの少からざりしなり。人民と兵士と兩方鎮靜ならしむるは容易の業にあらざりしなり。蓋し人民は平和を愛するが故に温良平和の皇帝をこのみ。兵士の好む所の皇帝はこれに反して武斷的にして、大胆勇敢、掠奪慾の盛なるものたらざるべからず。これによりて兵士等は己の欲する所を人民の上に行使し、其給料を高め己等の貪慾と殘忍とを満足せしめんとを願ひしなり。

かくの如くなりしかば、己の天性に於て又は特別に工夫して、この兩方を制御し得べき評判を有せざる皇帝は常に失敗に歸せざるを得ず。彼等の中の大部分は皇帝の位に昇りて日尙ほ淺きがためにかの兩者の反對を調和するの困難なるを見て、人民の意を損ふを顧みずして只兵士の方のみを満足せしめんとするに傾く。これ畢竟必要に逼られ

れてのことあり。皇帝等は畢竟何れか一方の憎惡を被むることは到底避くべからざるが故に人民に憎まるゝことを敢てすべからず。若し己むを得ずんば最も力強きものゝ憎惡を招からざらんとするにあり。

故に新に位にのほりて多大の援助を要する所の皇帝等は人民よりも寧ろ兵士等の力に依頼せんとするものなり。

それ然らば則ちかのマークス、オーレリウス (Marcus Aurelius) バーチナツクス (Pertinax) アレキサンダー皇帝の如きは、正義を愛し、殘忍を惡み其温厚なりしこと人に超え、優雅寛大なりしが爲に、マークス帝の外はすべて不幸の最後を遂げたり。マークス帝の世にあるや名聲を保ち、死するや名譽を残したり。其の然る所以のものは、蓋し彼の皇位に昇れるは父祖の業を繼承したる者にして、人民の恩惠にもよらず、兵士等の援助にも頼らず。而して極めて善良なる性質を發揮したるために

彼の名譽を高め、民の尊敬をうけ、而かも彼の在世中己の名譽に心驕りて限を超ゆるが如きことなかりしかば、民人の惡みと輕侮を招くことあらざりし也。然るにパーチナツクスの皇帝となるや、兵士の意に反するものあり。兵士等はコムモダスの下に放肆なる生活を送りしに、パーチナツクスは嚴肅なる規律を適用せんとせしかば、其喜ぶ所ならざりしなり。この兵士の不滿に加ふるに、彼が老齡の故を以て輕侮を招けるものあり。爲に其の位に上るや、忽ちにして滅亡したり。乃ち知る、憎惡の來るや二途あり。其一は善行にして他は惡行なることを。國君が己の權力を保たんが爲に惡人たらざるべからざるは、是を以ての故也。其國主要の徒、即皇帝の位を保つに最も有力にして重大の關係を有するものが一人、民たると兵士たると又は貴族たるとを問はずもし、腐敗したらん乎。汝は彼れ等の機嫌を伺はざるを得ざるを以て、この場合正直德義は却つて有害なるものなり。

余をして次にアレキサンダーのことを語らしめよ。彼は極めて公正純良の君主なりしかば、彼を稱するもの言のうちには曰く「十四年間の治世中公平なる裁判によらずして死刑を宣告せられたるもの一人もなかりし」と。然れども彼は柔和にして、母の意に任せて身を處したりしかば、遂に名譽を墜し、兵士の陰謀によりて身を亡すに至りぬ。之に反し、コムモダス、セヴェラス、アントニナス、カラカラ、及びマキシミナス等の行動を見るに、彼等は殘忍貪慾にして不正といふ不正をば人民に向つて行はざるなかりき。而もセヴェラスを除き、他は皆不幸の最後を遂げたり。セヴェラスは極めて豪胆大度の君なりしかば、人民を壓制したりしが、一方には軍人の好意を失はず。由つて以て其治世をして幸福の者たらしめたり。彼は人民に對しても、軍人に對しても、賞賛すべき人物として見らるゝことを得たり。又兵士人民等も極めて從順にして、彼れに對して満足したりしなり。彼が新に皇位に即き

てその行爲の偉なりしが爲に、余は彼が如何に巧みに狐と獅子との性質——是余がさきに國君の性質として大切なる所以をのべたる所なり——を體現したる乎を簡單に説明せんと欲す。

セヴェラスがデュリアンの優柔にして爲すなきことを見るや、スクラヴォニア (Sclavonia) の部下の兵に説きすすめてローマに赴かしめ、近衛兵の爲に殺されたるバーチナックスの讐を復せしめたり、彼は復讐の旗色の下に毫も皇位などには意なきものゝ如くに装ひて進軍する程に其真意は誰も看破する者なくして伊太利に入れり。其ローマに至るに及び、元老院は其威に恐れ、デュリアンを殺してセヴェラスを立てぬ。然れども彼が全國の主權者となる迄には尙ほ二個の困難の横はる者ありき。一はアジアに於てアジア駐屯軍の大將ナイガー (Nigam) が自ら帝と稱せると也。彼は之を除かざるべからざるなり。其二は西方の將アルピナス (Alpinus) が同じく自ら僭して帝と稱せる

と也。又之を除かざるべからざるなり。然れどもこの兩者に向つて戦を宣ふることの無謀冒險なるを思ひ、自らナイガに對抗せんと決し、先づ奸計を以てアルピナスを欺かんと欲し、書を送つて曰く、元老院より國君に選ばれたればこの位を足下と共にせん、意切也と。乃ちシーザーの號を彼に與へ元老院の同意に依て己の同伴となしぬ。アルピナスは其位をよるこんで掌握し、これを眞面目の沙汰と思ひぬ。已にしてセヴェラスはナイガーに克ちて之を殺し、東方を定めてローマに歸り元老院に讒訴して曰はく、アルピナスは自己の恩惠を被りたるにもかゝはらず、奸畧を以て己を殺さんと力めたり。余は止むを得ずアルピナスに向つて進撃せざるべからざる也。乃ち其の忘恩を膺らさんが爲にとて進んで佛蘭西に至り、彼の指揮の權を奪ひ、彼を死に處して遂に己が奸計を實行し了んぬ。

此の國君の行爲を審かに考査せん乎。其猛烈はライオンの如く、そ

の狡猾は狐に似て、而かも萬人に恐れられながら、己が軍隊の惡む所とならざりしを知らん。而して彼が新に皇位に上りたるにも拘はらずよく其位を保ちたる所以は、其大なる名聲によりて掠奪に對する人民の怨嗟を鎮め得たることを思へば、何人も之を以て不思議と爲さざらん。

然るに其子アントニナスは卓越したる才能を備へ優良の人材ありしかば、人民に稱嘆せられ、兵士に感謝せられたり。何となれば、彼は其性武勇にして、よく艱難にたえ、勞をいとはず、聲色を以て男子の腸を腐らすものとなしたりしかば、大に兵士の意に叶ひたり。然れども其殘忍は度にすぎ、私事よりして又、或特別の折に於てローマ人民の大部及びアレキサンドリアの民を死に致し、かば全世界こ亘つて彼を惡むに至り。近侍腹心の侍臣よりして危険視せらるゝに及べり。かくて彼は軍陣の中に在りて一將の爲めに殺されしなり。是によりて考

ふれば、かくの如き暗殺は熟慮の餘に出で、其性極めて頑惡なるものなり。故に國君と雖も避くること能はざるものなり。何となれば己の生命を輕んずるものは、隨時にこれを失ふことを敢んすれば也。然れども、かゝる種類の暗殺の如きは稀なるを以て、これを患ふること甚しきを須ひず。只近侍腹心のものに對して多大の注意を怠らざれば以て足れりとすべし。アントニナスはこの點につきて大に缺如たるものあり。何となれば暗殺者たる一部將の兄弟を慘殺して、激怒を買ひ而かも彼を酷使し脅かすこと日々の如くにして、尙己の身邊に侍せしめたるを以て遂にかゝる非業の死を見たりしあり。

次にコムモダスを見ざるべからず。彼は父の業を繼承したるを以て位を保ち、人民を満足せしめ、兵士の心を繋ぐは難事にあらず。只父の業を踏襲すれば足れりとなすべきなり。然れども性獐猛殘忍にして、人民を掠奪し加之屢々親ら闘技場に身を運んで格闘者と技を競ひ

て皇位の威嚴を潰したるのみならず。此外多く天皇にあまるじき悪行不徳を行ひしかば兵士の輕侮を買ひ党派の罵る所となり。他党の恐れ惡む所となり。遂に陰謀によりて殺されたり。

マキシミナスも全じく武勇の天皇にして大に戰鬪を好みしかばアレキサンダーの優柔に飽きし兵士等は之を殺して彼を皇帝となせしが彼れは之を保つこと久しからざりき。是彼を恐れ惡むべきものたらしめし二個の原因ありしに由るなり。第一は彼の出の賤しきにして即ち以前トレース (Thraos) に於て羊を飼ひしことは遍く人の知れる所にしてそれが爲めに世の輕侮を買ひたりしなり。而して第二は彼が初めて此國に入り來るや、ローマの警視總監及び、ローマ國の他の至る所に於ける部將の殘酷の行爲のために彼が殘酷なりとの惡評を被りたりしこと是なり。

かくの如くにして天下悉く彼が生れの賤しきことと行爲の殘忍を

るとによりて心和平ならず。彼が暴行を豫想するに及びてや、叛謀を企つるもの、曰くアフリカ、曰く元老院曰くイタリア、及びローマの全人民、而して彼が部下の軍隊もまたアクイリア (Aquilina) を奪ふこと困難にして而かもマキシミナスは日に益々殘酷なるを見て遂に謀反に與みして彼を襲ひ之を殺戮せり。

かの柔軟なるが爲めに忽ち人民の輕侮をうけ王位より消え去ることの速かなりしヘリオガバラスや、アクリナスや、チュリアンやなどの爲に我が筆を勞することをなさじ。只余は茲に結論して曰はん。當今の世界に於ける如き優良なる政府に於ては國君はかかる非常の方法を以て兵士の歡心を求むるを須ひざるあり。蓋し兵士等は全然等閑に付すべからずと雖、當今の國君は何れもローマ帝國當年の軍隊の狀態の如く州の行政と密接の關係を有する者にあらざるがためにこれを處置するの手段方法は極めて易々たるものあるなり。故にロー

マ帝國の當時に於ては人民の満足を買はんよりも寧ろ兵士の歡心を求むる方必要なりしならば、そは兵士の方が一層權力の強かりしに由るなり。然れども當今は之れと異なり、何れの國君と雖も兵士の満足を買ふよりも人民の意を迎ふるを有利なりとす。但しトルコ國及びサラセン國なるソルタンに於ては然らず。蓋しトルコに於ては一万二千の歩兵と一万五千の騎兵とが常に國君の近侍に在り。彼等の上に國家の權力と安全とが懸れるを以てなり。即ち人民の他のとはさて置き先づ第一に兵士を味方になし置かざるべからざるあり。ソルタン國に於ても亦全じ。即ち人民を疎外して兵士と親まんと利益なり。蓋しソルタン國は全然かゝりて兵士の權力にあるを以ての故のみ。茲に注意すべきはマホメット教徒たるエデプトに於けるソルタン等の政府は他の王政とは全然其種類を異にするの一事是れなり。而かもかのキリスト教徒の法王政とも相似たるものあるなり。法王

政に於ては新しき國君を立つるにも繼承によりて王位を得るにもあらず。王死して其子は王の土地をも位をも繼承せず。只選舉權を有する者等に選ばれたる者が其位に上るなり。この制度は舊來行はるるものにして其政府は新規のものに稱するを得ざるを以て新王政がかゝり易き危険を有するとなし。國君となる人は新たなるべきも、又恐らく名稱は新たなるものなるべきも、習慣法律は舊來傳はれるべきものにして、國君は恰も繼承による者の如くに思惟せらるゝなり。然れども余は本題に立ち歸らざるべからず。以上述べたることをよく考ふる者は何人とも雖も、惡み又は悔りば常に王位を滅亡せしむる所の原因にして憎惡や怨恨やは如何にして起り來るかを判斷することを得べし。或者は或方法を以て政を行ふに對し、他の者は全くこれに反するの政を施し、而して方法の如何をとはず。或は幸福なる結果を得。或は不幸なる結果を得るの如何にして起れるかを知るに至

るべし。パーチナックスやアレキサンダー等は成り上り者にすぎざるが故にかの父祖の位をつげるマーカス等の真似するは危険にして徒爾に属するを知るべし。又カラカラやコムモダスやマキシミナスやの如きがセヴェラス等の行爲に倣はゞ、毫も其権力と徳とを有せずして形のみを踏襲すること故、全しく其甲斐なきを知るべし。故にもし新國君にしてマーカス等の行爲に倣ふべからず。又セヴェラス等の跡を襲ふべからずとせば、如かず、其國の基礎を築くにつきて必要な部分をセヴェラスに形どり、一旦位を得て之を擁護するの法に於てはマーカスの爲に倣はんには。

第二十章 要塞其他防衛工事は國君にござり

て有用なるか又は有害なるか

或國君は一層國土の安全をはからんが爲に民の兵備を禁するあり。又或國君は其國を小區劃に分つあり。或ものは黨派を造らしめて互に對峙牽制せしむるあり。又或ものは施治の始めにあたりて疑はしき者どもの意を迎えて之を己の味方になつくるに努力するあり。或は城砦を築くあるかと思へば、又却つて之を毀つものあり。而して是等千差萬別の方法を施せる國家を考察するに非されば、一般の法則を與へがたしと雖、余は概括して之を論せんと欲す。

賢君は民人の兵を沒收することをなさざるなり。否もし彼等に武備なきを見れば却つて之を供給するものなり。兵を給し、之を軍陣の

用に訓練する時は、即ち彼自身の武にあらすして何ぞや。始め疑はしかりしものも來つて汝に忠實とあるべきなり。始め忠實ありしものは益々忠心を固うすべきなり。而して汝の民は皆汝の與黨となりぬべし。而して汝の政に服従する民衆が全部兵に堪ふるにあらざるを以て兵を帶ぶる者に對して汝が特別の取扱をなし恩恵を加へなば、彼等は更に固く汝に服すべきを以て他に比して一層勇膽ならしむることを得べし。而して兵士ならざるものも兵士は危険に臨むものなるが故に汝が特に恩恵を加ふるとなし。己等を疎外するの故とはなさじ。

然れども汝もし武器を沒收し之を禁するに於ては汝は彼等の怨を買ひ彼等の間に疑惑を醸すべし。彼等もし憶病ならん乎。譎畧ならん乎。何れにしても汝を嫌惡せしむるに足るものなり。而して汝は兵備なくして國を保つこと能はざるが故に、傭兵に倚賴せざるべから

ざるに至る。傭兵の性質につきてはさきに之を述べたり。只傭兵にして幸に良兵なりとせんも、彼等は王を擁護して敵をやぶり而して王の良臣下たること能はじ。故に國君が新に政權を得る時は其臣下に武備を施すことは歴史に於て多くの實例の示す所なり。然れども國君新たに一敵國を羸て之を舊本領に合併したる場合に於ては、其武備を禁することをよけれ。これ只此る勝利の場合にのみあらはるゝことあり。而して征服したる民をして漸次に怠惰にして柔弱なるものたらしめ、王の全勢力は其固有の兵士の上にあるやうにすべきなり。この固有の軍隊は本國に於て訓練せられ常に王の身邊にあらしむべきなり。

賢明なりと稱せられたる吾人の祖先は、ビストイアを保つには之を黨派に分つを必要とし、ピサを保つは城砦を築かざるべからすと稱するを常とせりき。故に彼等祖先が服屬せしめたる幾多の都市に於て

一六〇
黨派をつくりて之をして相互に争はしめ相牽制せしめたるは之を治むるに一層容易ならしめんが爲なり。伊太利が未だ治定せず。動搖懸垂の状態にありし時には、かゝる方策も有効なりしならん。然れども今日に於ては吾人にとりて何等の價値なきものごす。余は黨派を造ることは何等の効をなすものにあらずと確く信する者なり。もし朋黨の分立あらん乎。敵の近寄せ來りし時朋黨の中權力弱き方は必ずや敵に通じ他の黨は之を防禦するに力足らざるなり。ヴェニス人が其權力の下にある都會にゲルフ(Guelph)ギビリン(Ghiblins)兩黨を分立せしめしはかゝる理由に基きしことならん。彼等は兩黨をして流血の惨をなさしめざりしも、兩黨の不和を煽動したりしが故に遂には市民自ら其渦中にまき込まるゝに至れり。即後に至りてこのこと明かになりし如く豫期に反してヴァリア(Venice)の敗によりて一黨は武器をとり遂にヴェニス人をその國より追ひ出したたりしなり。故にか

ゝる方法はこの事實が證明する如く國君にとりては策の得たるものに非ず。幾分にも權力を有して存立する所の政府はかゝる黨派を生せしむることをなさず。平時に於ては一層治め易からしむるに効あるが如しと雖も戰時に於て忽ち其愚策なることがあらはるるに至るものなり。國君は己を苦しめ、艱難ならしむる所の障害に打ち勝ちてこそ偉大なること疑を容れず。故に運命の神は新國君をして其欲する所の名、即舊國君に比して更に大に彼に必要なこの名聲を高めしめんと欲する時は、彼に敵をさし向けこれに向つて大に企つるあらんことを慫慂するものなり。而してこれに打ち勝つべきの機會を與へ、其敵が用意せる如き一步一步によりて進歩せしめんとす。是れ蓋し謂ふ所の天の將に之人に大任を下さんとするや其身志を苦しむるものに非ずや。その理それかくの如し。故に賢君は機會のあらはるゝ時は大に巧妙機畧を弄して己自身に敵意用心を失はざるべく、時

至りてこの敵や障害をやぶる時始めて王の偉大なることがあらはれ
来るものなりと思惟するもの少からざるなり。

國君殊に主權を得て未だ久しからざる所の國君は其始めに當りて
大に信任したる所の者よりも其始め多少疑念を挿みたる如きものよ
り一層の信頼と援助とを見出すこと多きものなり。シエンナ (Vienna)
の君主バンドルフアスベトルッキ (Pandolfo Petrucci) は寧ろ疑を掛けた
る者によりて其國を治めたり。然れども是事たる一般に然か取扱ふ
べからず。其臣下の如何によるを以てなり。余は云はんとす。其統
治の始めに於て王に反抗したるものにして他人の援助を欲する如き
性質の民ならば容易に國君有用の臣に化し得べきなり。即ち一層忠
誠の者とならしめ得べきなり。何故かと云ふに、彼等は已等の振舞の
如何によりては已等に對する不利なる僻見を取り去り得べきことを
知りて其行を善良にするに躊躇せざればなり。故に國君は彼等によ

りて利益を受くること夫の只一途に王の命をかしこみて已の職を失
はざらんことをつとめ、王の嫌疑如何を顧みざる如き者より受くるに
まされり。

茲に余は國君に向て一の必要な警告を發せざるを得ず。何そや
國內住民の助によりて其國を得て新たに君主となりたるものは宜し
く住民等が已に内應したる原因の何なるかを思考すべきと是也。も
し其原因が汝を助くるの真意にあらずして、舊政府を憤り之を倒さん
が爲の方便として汝に與みしたるものなりせば、其等を満足せしむる
こと不可能なるが故に、之を已の味方とし保つこと多大の困難あらん
而して古今の歴史を考査しなば舊來の政治に満足し従つて汝に敵た
るべき人民を得るとは舊來の政治に不満足にして汝に味方たるべき
人民を得るよりは、却つて一層容易なることを證明すべき實例少から
ざるべし。

古來國君の慣用したる國土安全の防禦手段は城塞壘壁を設くることにしてこれによりて侵入し來るべき敵を防遏し内亂の場合には自身遁匿の場所としたるなり。而してこの方法たる古來用ゐられたる者なるが故に余は之を非難するものにあらず。然れども今日の世界に於てはかのニコロヰテリ (Nicolo Viali) は其政府を安全ならしめんか爲にカステロ (Castello) 市の二城砦を破毀したりと稱せらる。オルビニ (Orini) の君ギドバルド (Guidobaldo) はシーザーボルヂアの爲に追ひ出され已が國に歸るや國內すべての要砦を毀ちたり。而してこれによりて再び敵の手中に陥ることなかるべしと思ひぬ。ベンチヰググリ (Bentivoglio) のボラグナに歸るや又同一の事を行へり。知るべし城塞は時代によりて或は有用に、或は有害なることを。而して一所に於て効を奏すれど他所に於ては全等の害を生ずることを。故に歸する所は國君にして隣國よりも已の民を恐るゝこと更に甚しきものあれ

ば宜しく城塞を存せしむべきなり。反之より多く隣國の民を恐るれば宜しくこれを毀つべきなり。スフォルザ家のフランセスコ、スフォルザが築きたるミラン城の爲に被りたる害は他の何れの原因より來りし害よりも甚しきものあり。故に最良の防禦手段は民の惡みを受けざるにあり。民にして一旦王を惡まん乎。百の城塞も何の用ぞ、彼等一たび兵を執つて起たば立ちに外國より來りて彼等を助くるもの生せん。當今の世界に於ては城砦によりて利益を得たる例は殆んど之れあるなし。只フアールイ (Fruel) 伯爵夫人が、其夫ヒエロニモ (Hieronymo) の死したる時、人民の怒を防ぎ止めミランより、援軍を待ち再び位につくことを得たるは城塞の効によりしといふ一例ある耳。而かも當時人民は外來の君主によりて救はるべき状態にあらざりしなり。故に曰く、伯爵夫人にとりては第一回目に於ても第二回目に於ても千百の城砦よりも、一の人民の愛情を得たらんこと如何ばかり優りしこ

となりけん。考へたる上にてこの種城砦を築きたる人をもかゝることをよく考へたる上にてこの種城砦を築きたる人をも又この城砦を顧みざりし人を非難せんとするものにあらず。只威砦の力を飽までも頼みて人民の怒をも侮をも意に介せざる如き國君をば非難せざること能はざるなり。

第二十一章 國君は其名聲を博する爲に如

何に身を卑うすべきか

國君の名譽は大事業及勇敢なる行爲の勳功赫々たることによりて高めらるゝよりもより以上に彼の名聲を高むる所以のもの他にあることなし。吾人は當今の世界に於てアラゴン (Aragon) 王フェルナンド (Ferdinand) 即ちスペインの現皇帝の如き人を有す。此の人や正さ

しく新國君と稱すべく最爾たる一小國の弱君主なりしがキリスト教國中の大君主となれり。而して彼の功績を考査せんかすべて勇敢なる行爲にして其中には非常に卓越せる者あるを知らん。彼は治世の始めにグラナダ (Granada) 王國を侵畧したりしがこれ彼が偉業の基礎をなしたるものなり。彼は其侵畧の始めに當りて徐々に之をなしたり。少しも障碍の來らんことを思はざりき。而してカスチルの男爵家をして自己に心を向はしめ、何等革命的の事業をなすを得ざらしめ、不知不識の間に名聲を博して其權威は男爵家を壓するに至れり。彼は已の軍隊を支ふべき資を教會及人民より徵集し其戦役の永きによりて軍勢に對して嚴肅なる訓練と鞏固なる基礎とを得。後に名譽ある大勝利を得るに至りしあり。加之、彼は更に大なる計畫を實行せんが爲に常に宗教に口を籍りつゝ信心深き残忍を以て、マラーニ (Marrani) と稱する猶太族を勦滅したり。噫、これより甚しき慘酷と不思議のこ

とまたあるべきや。彼は全しく宗教の手によりて民を欺きつゝ伊太利へ遠征したり。佛蘭西を攻撃したり。アフリカに侵略したり。其外多くの計書を實行したりしがすべて民の心を繋ぎて已を賞嘆せしめ以て已れの陰謀の如何なるべきかを豫期したり。而して彼の企圖たるや極めて急激に次より次へと飛ひうつり着々結果を生ずるものありしたため何人と雖も靜かに之を端倪するも能はず。又は彼に對して永く事を續くること能はざりき。

凡そ本國の行政に於て驚嘆すべきことをなし。これを人民に示し置くとも亦國君にとりて利あることなり。例へばミラン市のベルナルドのなしたる例の如し。乃事の悪きと良きとを問はず。其の結果の已に悪しき報いの來ると良き影響を及ぼすとを論せず。兎も角も世人の耳目を聳動せしむる如き非常のことは機會あるごとに之を行ふべきなり。特に國君たるものは其行動に於て卓越偉大なりとの聲

譽を博するやうに振舞ふべき注意を有せざるべからず。大に尊重せらるゝは眞實なる味方として又は寛容なる敵として己を示す時にあり。換言すれば躊躇することなく一方の味方にて他の敵なる旗色を鮮明にあらはす時にあるなり。是れ一層淡泊にして國君らしきと全じく又一層利益多きこと中立曖昧なる態度に優れること萬々なり。若し王の隣國の二強が互に干戈を交へんか王は優勝者をば恐るべきか否かの情態にあるなり。其何れにもせよ王は始より旗色を鮮明にして其一に與みするを利なりとす。何となればもし第一の如き場合に立ち至らば王は勝者の餌食たるべきのみ。而して敗者の指彈嘲笑を買はんのみ。又王を迎へ王を擁護する人は何人もなげん。勝利者と雖も已が困難の際に來り救はざりし者を諒承することには決してあらざるべければなり。又敗者は如何なる態度に出づるか云ふに衆を模へて其危難に赴き助けざりし者を迎ふるの理なかる

場合には宜しく中立の態度を取るべきなり。何とあれば汝もし中立にして時に随て一方を助けば他の一方をして一敗地に塗れしむべければなり。而して汝は勝利を助けたるによりてこれに己が意を恣にするを得べく。又汝が助けたる方が敗をとること萬あらざるべければなり。

茲に注意すべきはもし回避し得べくんば國君は已より有力なるものと攻撃的戦争に於て同盟すべきものにあらざること是なり。何となればもし勝利を得れば汝はかの権力優れたる盟友の願使に従ふを肯んせざるを得ざるべく、而して他人の命を奉じて行動する如きは國君たるもの、宜しく爲すべからざる所なればなり。

ゲニス人は何等の必要もなきに佛人と盟約してミラン公に對戦したり。是彼等が滅亡の原因たりしなり。然れども到底回避すべからざる場合例へばフローレンス人が法王及スペイン人の軍隊をロン

バルヂアにさし向けられたる場合の如きに於ては、宜しく前述の如き法則を遵守すべきなり。かゝる場合に於ては何等確定安全の道の聽くべきものあらず。凡そこの世の中の事は、一難を避くれば必ずや他の災を、迎へざるを得ざる如き、仕組みになれり。故に人の智慮は最も危険なるをよく判知して、其最も少きを選ばざる可らず。且又國君たるものは善良卓越なる性質を好愛し、如何なる方法たるを問はず其優秀なる手段を尊敬することを表明すべきなり。彼は又人民をして平和に生活し、生業にいそしむやう奨励すべきなり。商たるを農たるを工たると其他何たるを問はず、其業をたのしんで、己が得たるものを享樂することを恐れざらしむべく、己が所有地を奪はれんことを恐れて放棄することなからしむべく、新たなる租税の賦課を恐れて商賣を控ふることあざらしむべきなり。のみならず國君は己の領土權力を擴張する如きものを恩賞し、負擔を免除する如き法を設けて、之を激

勵すべし。且又國君は、一年中の便利なる時季に於て、人民を饗し、珍味、演劇、其他保養の具を供して、彼等を樂ましむるの義務ありとなす。又各市は數區に分れたるが故に、是等の小社會を尊敬すべく、時々には輕快の愉情を示して、彼等と共に樂しむべく、又人道寛容の事例を示すと然るべし。然れども決して己の威嚴を損するが如きことなく、如何なる場合と雖も之を確保するに心掛くべきあり。

第二十二章 國務諸大臣につきて

諸大臣の選擇は國君にとりて重要な意義を有する者也。何となれば國君の人となりや、其才幹等につきて世人が下す所の第一の判斷はその周圍にある人物如何によつて定まるものなればあり。國務諸大臣にして賢明忠實なれば、必ずや其國君は必ず智慮の士なり、才能の大

臣を選擇することを知りたる者は、諸大臣をして忠實ならしむることを知れる者といふべし。反之、もし諸大臣にして無能劣悪の人あれば、このことや必ずや國君に餘波を及ぼすものなり。彼がなせる第一の過失は諸大臣を選ぶその中にありしを知らざるべからず。

アントニア・ダ・グエナフロ (Antonia da Venafro) がシエンナ (Sienna) の君主パドルフォ・ペトラッキ (Pandolfo Petrucci) の臣なるを知るものは、かゝる名相を選びたるペトラッキの智慮の君なるを誰か思はざらん。凡そ人は才能資質に於て三つの階段に分つべき者なり。已を理解するものあり、は一なり。他人の説明を理解するものあり、是二なり。已をも理解せず又他人の説明を理解し得ざるものあり、是三なり。第一は卓越、第二は尙ほ用ゐて然るべく、第三に至りては全然不可なり。パンドルフォは第一級の人物ならずとするも、第二に位すべし。何となれば國君にして人の行爲言説によりて其人物の良否を區別するを得

は、以て其臣下の良否を區別することを得べく、其一を稱讚し、他を矯正するを得べければなり。而して大臣は王を欺くとあたはず。彼以て其位置を保つべきなり。

諸大臣を判知すべき法則として次にのぶるものは、蓋し誤なかるべし。王の官吏にして、王の爲を思ふよりも、自己の利益をはかる者は決して良相となすべからず。又王は彼に信任を置くべからざるなり。何となれば、凡そ相國たるの本務は、自己を忘れ、我が利の如きは顧みずして、只國君の利を思ふより、外他念あるべからざる者なればなり。

又一方に於ては國君たるものは己の宰相を忠實ならしむるために彼の爲に大に意を用ゐざるべからず。國君は彼を尊敬すべく、速に昇進せしむべく、國君なければ以て立つこと能はざるを知らしむべく。其位階は更に高きを望み得ざるに至らしむべく。其富は以て更に多きを貪り得ざる程に大ならしむべく、其國をして變動あることを恐る

ゝに至らしむべきあり。

國君にして國臣がかくの如き情態に至るを得れば、則ち君臣水魚互に相倚頼すべし。然らざれば、其結果は良好なるべからず。而して一方は必ず慘劇に陥るべし。

第二十三章 便佞の徒は如何にしてさ

くべきか

余は茲に重要な意義を有する一問題を看過せざるべし。此過失に對しては、國君は極めて賢明にして極めて卓越なるにあらざれば、身を守ると頗る難かるべし。何ぞや曰く阿諛便佞即ち是れ也。而してこの種徒輩の動物に至りては、史上其の例に乏しからず。凡そ人は自

負心強き者にして、甘言は耳に入り易し。故に是等の人に向つて自己を保たんとは頗る難きことなりとす。便佞の徒の災禍に陥らざらんやう安全の方法は他なし。自己が忠諫を喜んで眞實に聴くことを万人に知らしむるにあるのみ。然れども万人をして其の言を呈せしむる時は、國君は己を害し其尊嚴を傷くるものなり。故に智謀ある君主は第三の方策をとらざる可らず。即ち國中より深慮ある人を選びてこれらの人にのみ眞實を語るの權利を與ふべく、而かも己の要することのみにしてそれ以外は何も云はざらしむ可き也。彼は万事につきて彼等の意見を吐露せしめて後、己が思ふ所の決定を與ふべく、而かも彼等に聴けば、聴くほど自由の精神を以て己も語り大なる親切を以て、彼等の言を採用するとの知れ渡る様に振舞ふべきなり。然れど彼は是以外何人の言にも聴く可からず。一旦決定したることにつきて再び云ふことなからしむ可く、一旦とり上げたる決定を再び後へ戻すとは、

ある可らず。何人ぞ、雖もこの教を守らざる所の君主は、阿諛によりて大事を過まり之を墜落せしむるか、多數の忠言に接して、多岐に迷ひ、己の計劃を變更し、己が器量を下げ、他人の嘲笑を招くに至る。余は是の例證を、近世の事實より示すべし。

現皇帝マキシミアンの臣ファザーリョーカス (Father Innocent) は會て帝の性格に就いて曰く、帝は何人の諮詢をも聽かず、而して己自身の判斷己の傾向に従つて行動する所あらずと。而かく評せらるる所以は前述の法則に反して云爲するが爲にして、帝の性開放的ならずして己の秘密は何人にも打ち明くることなく、何人の勸告をも容れざるに基けるなり。彼の決斷したるものが實行せらるるに及び、普ねく世人の知る所となるや、彼が近侍の者等は彼を諫めて之を放棄せしめんとつとむ。然るに彼の性善にして、其計畫を放棄しぬ。是に於てか、夕に決定したるものは、朝に變更せらるることになり。何人も彼の計畫を與

り。知ることなく、何人も彼に倚頼すること能はざるに至りぬ。
故に國君は常に知謀の士に計るをなすべし。然れども人民の欲
する所に従ふにあらざりて、自己自身の意の向ふまゝにせざるべから
ず。又己が要求せざる人民の忠言の如きは之を止めしむべし。然れ
ども之を聽かんと欲するに於て吝かるべからず。一旦要求したる以
上之をきくに躊躇するなかれ。然れども國君の嬉嫌を損せんことを
恐れて言ふことを控へんとするの微候を見なば、忽ちこの時に於て不
嬉嫌を示すべからざるあり。

國君が聰明なりとの名聲を博するは是れ彼が固有の卓越より出づ
るに非ずして、彼が輔弼の臣の賢慮によるものなりと信する者多し。
是れ明に誤れる説なる耳。除外例を許さざる一般の通則として、凡そ
國君たる者は如何に優良なる顧問の臣下ありと雖も、之れを採用する
能はず。只偶然にして正直智謀の臣僚あり、是れに全体の政務を打ち

任することあれば、兎も角もなり。此場合に於ては、少時は其政治も良
好の状態にあるべし。然れども永續する者にあらず。智謀の臣等は
忽ちにして國君を追ひて其位を己に奪ふべければなり。而かも自身
に大なる智謀を有せずして、一人以上のものに事を計る時は、この數人
の意見は一致することなく、國君も亦之を總括するの才能に缺如たる
者あらん。人は各々自身の利益と氣儘とに従つて意見を立て、國君は
これを訂正し又は誤たるを發見するの才能だも有せざるに、他に良き
智恵を貸すべき人も出でざるべし。蓋し人は必要に迫りて止むを得
ず善良ならしめらるるに非ざる以上、常に惡き者とし知られたればな
り。故に次に述ぶるとは明なる事實也。曰く、善良なる智謀は、其何れ
の○人○より○出○づ○る○に○せ○よ○畢○竟○す○る○に○國○君○の○智○慮○よ○り○出○づ○る○も○の○に○こ○て○
國○君○の○智○謀○が○輔○弼○諮○詢○の○士○の○良○智○慮○に○基○く○と○は○是○な○き○こ○と○と○す○。